■追悼のことば

大島義彦教授の回想と感謝
山形大学医学部整形外科名誉教授　渡 辺 好 博
大島義彦先生を悼む　山形大学医学部整形外科教授　荻 野 利 彦
純なる魂を悼んで　秋田赤十字病院院長　宮 下 正 弘
友　大島義彦君を偲んで　聖隷浜松病院
手の外科マイクロサージャリセンター長　斎 藤 英 彦
大島義彦君の死を悼んで
新潟大学医学部昭和４１年卒同級生
新潟大学整形外科同期生中条中央病院院長祖父　江 牟 婁 人
大島義彦先生を偲んで　すだ記念整形外科院長
元山形大学医学部整形外科助教授　須 田 昭 男
兄貴へ　済生会山形済生病院院長　浜 崎　允
大島義彦先生との思い出　済生会山形済生病院院長　浜 崎　允
大島義彦先生を偲んで　小白川整形外科クリニック院長　佐 本 敏 秋
大島義彦先生とみゆき会病院
特定医療法人みゆき会理事長　原 田 順 二
Ｄｒ大島のこと　みゆき会病院院長　太 田 吉 雄
大島先生あっての寒河江市立病院　寒河江市立病院院長　佐 藤 政 悦
大島先生の思いで　公立置賜総合病院整形外科医長　林　雅 弘
大島義彦先生を偲んで　山形県立保健医療大学教授　伊 藤 友 一
Last　son　山形大学医学部整形外科講師　武 井　寛
弟子を育てる大島先生
新潟大学整形外科名誉教授新潟医療福祉大学学長　高 橋 栄 明
大島義彦先生に送る言葉　新潟県立中央病院診療部長　東 條　猛
大島義彦先生を偲んで
ＮＰＯ法人ライフサポート協会理事　若 村 利 雄
大島義彦先生からの最後の電話
ＮＰＯ法人山形県トレーナー協会理事長　皆 川 清 彦
いい人生だったよな
長野県下伊那郡豊丘村河野小・中学同年生　奥 山 義 臣
大島先生を偲んで　山形県立保健医療大学理学療法学科長　伊 橋 光 二
大島先生の思いで
山形県立保健医療大学理学療法学科４年　大 野 崇 志
義彦さんを偲ぶステビアの詩
長野県下伊那郡豊岡村河野小・中学同年生　久保田 倭子
父・大島義彦と私　長男　大 島 裕 紀

大島義彦教授の回想と感謝

山形大学医学部整形外科名誉教授　**渡　辺　好　博**

第二次世界大戦で負けてから日本の医学教育には大きな変革があった。それまでは医学部を卒業すれば医師免許証を獲得できたのが、インターン及び医師国家試験をクリアしなければ免許証が獲得できないと言う改革であった。その趣旨はよかったが、経済的な裏付けがなされていなかった。従って卒業後のインターンの１年間は無給という哀れな状況であった。この矛盾が制度発足後やっと20年近くたって改革の火の手があがった。その先頭に立ったのが、昭和41年卒の後輩の学生達（その中に後年整形外科教室でなくてはならぬ人物斉藤英彦・大島義彦の名前がある）であった。吾々先輩もそれに同調して改革するのが当然であったが、医局という枠組みの中でそうすることは困難であり、このことに関し医局の保守性を指摘されても当然である。

私はその当時医局長という医局のまとめ役だったので、理論と実践では相反する誠に苦衷の日々を送った。青医連、三派、代々木派などいろいろ当時を思い起こさせる言葉がよみがえってくる。

こういうせっぱ詰まった状況を経由して、斉藤・大島を代表とする整形外科若手医局員は成長していった。河野左宙先生と田島達也先生はどちらかというと保守派であったが、斉藤・大島という若手のパリパリ改革派への信任は厚かった。

教室に筋電図室という検査室があった。そこには星源之助先生、錦織新一技官を初めとして数人の極めて真面目な若手整形外科医師が仕事をしていた。その中に皆川泓義・大島義彦の名前が出て来る。朝早くから夕方まで、暇さえあれば針を刺してブラウン管を見つめる日々。属している神経班には、そのうえ、Ｘ線放射能を浴びるミエログラフィーという危険な仕事も待っている。白血病発生と背中合わせである。超真面目人間でなければ長く務まらない。

去る９月14日「お別れの会」がしめやかに行われた。山形大学医学部整形外科学教室の礎を築いた最大の功績者の一人であった大島教授抜きで、教室の構築を語れないと思っている。

分厚い教室誌の発行をはじめとして、いろいろな機関誌の発行が実現され、教室の歴史を語るときの資料として大いに役立っている。また、学術振興会の設立、スポーツ医科学研究所の設立など多くの仕事を推進した。

山形県に脊椎診療の柱を構築した功績はなにものにもまして大きな仕事であった。これ一つをとっても、偉大な仕事をやり遂げたと絶賛される。

「お別れの会」の弔辞として、同級生の二人が学生時代のことを述べたが、当時から正義漢であり、行動力を持っていたことが伺えた。医療大学の生徒、看護学科の同僚、スポーツ関係者からの賛辞など聞いて、本当に広い分野での活躍が偲ばれた。

大島義彦助教授として山形大学が迎えたのは昭和54年である。新潟の教室から新開地山

形へ来ることを説得した当時のことが、夢のように思い出される。本当に医学、医療、スポーツ分野でこれ程まで大きな実績をあげるとは予測しえなかった。

大島夫妻並びにご家族の献身無しで教室の隆盛はなかったものといくら感謝してもしきれない思いで一杯である。

私にとって発足時、最重要な目標は、山形県の脊椎外科の確立ということだった。これは大島助教授なしでは不可能なことであった。大島助教授は全力で脊椎外科に献身した。そして、大島式の脊柱管拡大術を考案した。これによって多くの患者が救われているし、今後も増え続けるであろう。それを真似て何処かの病院長がさも自分が考案した方法でもあるような報告をしたこともあった。

ともあれ、大島助教授は、大勢の後継者を育成してくれた。そのおかげで、どれほど多くの山形県の脊椎患者の方々が助けられたことだろう。大島助教授の教え子達は、皆現在大病院の脊椎外科のトップとして、山形県の各地で多くの患者さんを助けている。

経営が破綻していた寒河江市立病院の改革や新しくみゆき病院を作る立ち上げにも大きな役割を演じた。そのおかげを蒙った病院関係者は、何時までもその功績を忘れないことであろう。

この他にもたくさんの仕事例えば蔵王にスポーツ医科学研究所の設立、ドクター・ラーマンを助けてバングラデシュに山形ダッカ友好病院の設立も成し遂げてくれました。いちいち取り上げていたらきりがないので、全てを述べないが、本当にたくさんの仕事をやり遂げてくれました。まさに、マルチタレントであったと言ってよいであろう。

整形外科助教授から看護学科の教授、山形県立医療大学の理学療法部教授へと転身して、医学医療の教育に献身したそのエネルギーと真面目さ積極性には本当に頭が下がる思いである。

大島教授の遺志を引き継いで、今後も、教え子である多くの整形外科医、スポーツ医学者、リハビリテーションスタッフが山形県を初め隣接各県で活躍してくれるであろう。

私は多くの医療関係者たちや患者さんとともに、厚く厚くお礼を申し上げたい。本当に有難うございました。

大島義彦先生を悼む

山形大学医学部整形外科教授　**荻　野　利　彦**

大島義彦先生の突然のご訃報に接し、深く哀悼の意を表したいと思います。

先生は昭和54年、山形大学医学部整形外科助教授として、新潟大学から赴任されました。以来先生は山形大学のみならず、山形県の整形外科の医療の牽引役として多大な功績を積み上げられました。

先生のお人柄と卓越した発想力、行動力を慕う多くの医学生が整形外科を一生の職業として選択し、整形外科医となったことは同窓会の皆様のよくご存じのことです。先生のご専門の脊椎・脊髄外科領域に限らず、先生の確立された診断と治療の考え方は山形大学および山形県の整形外科の中でかけがいのない財産になっております。先生の独創的で革新

的な発想から生み出された山形大学式脊柱管拡大術、G-rodなど数々の手術手技や脊椎インストゥルメントの考え方は、山形県内のみならず全国に拡がり発展を続けております。先生が精力を傾けておられた地域医療、リハビリテーションの充実、発展におきましても先生の蒔かれた種が芽を出し、いよいよ花を咲かそうとしているところです。また近年特に力を入れてこられたスポーツ医学の分野では、教室内でも一丸となって山形のスポーツの発展に貢献しようという機運がますます高まってきているところでありました。

このような時に、多くの同窓会員にとって精神的支えであった大島先生を失うことは深い悲しみです。先生が渡辺好博名誉教授の下で積み上げて来られた業績をさらに発展させて行くのが私どもの責務と考えます。先生と同じ同窓会の１人として、整形外科の発展に努力しようと思います。

大島義彦先生、安らかにお眠り下さい。

純なる魂を悼んで

秋田赤十字病院院長　宮　下　正　弘

10月半ば、山形大学整形外科教室医局長の福島重宣先生から書状が届いた。今年度の同窓会誌を大島義彦君の追悼号とし、そこに一文を記して欲しいとのことであった。後にも記したが山大整形外科学教室の同窓会誌は第２号を大島君が手がけ、手塩に掛けて育ててきたものである。またお別れの会のしおりを作る時にもどれ程役立ったことか、と思うと喜んで寄稿させていただこうと考えた。新たに文を起こすより９月14日の葬儀委員長としての挨拶が我が心情を伝えており、また沢山の参会された教室関係の方々に彼の純なる魂を悼み冥福を祈ったその日を思い起こして貰えればと考え、お別れの会の挨拶を載せさせていただくことする（ページ６）。

あれから季節は移り、木々もその葉を落とし晩秋の色が濃い。もうすぐ雪が山野を覆うだろう。友逝きて寂寞の想いは深まりこそすれ薄れることはない。「われわれも人生の秋に至ったのだ。残された生もそう永くはない」という想いはあながち季節のせいだけではないだろう。

あらためて長い交友に感謝し、大島義彦君の冥福を祈りたい。

合掌

友　大島義彦君を偲んで

聖隷浜松病院
手の外科マイクロサージャリセンター長　斎　藤　英　彦

大島義彦君は昭和35年入学の新潟大学医学部の同級生ですが、名前に私と同じ彦が付くよしみで入学当初から何となく親しみを感じていました。私達の学生時代は35年安保闘争の真っただ中で、医学部進学課程のときは休講が多く、よく教養部のキャンパスの裏の日本海に面した砂丘地の松林の中での青空教室で、安保や青春について語らい、時にはデモ

にも参加したりしました。その頃から彼は自分たちの教育問題だけでなく、社会問題や政治問題にも確固とした意見と信念をもって行動していたのが思い出されます。

医学部卒業と同時に大島君は扶美さんと結婚されましたが、今で言う人前結婚式でした。扶美さんがまだ学生だったこともさることながら、伝統にとらわれないお二人の生き方や、集まった友人達の多さに強い印象を受けました。

インターン生の教育環境や待遇の改善を要求したインターン闘争のため、同級生の多くは大学病院に留まりましたが、彼は青医連の活動家で、私はそのシンパとしていろいろな機会にお付き合いさせてもらいました。

河野左宙教授の主宰される新潟大学整形外科教室に入局してからは、家族ぐるみで親しく付きあわせてもらうようになりました。卒後３年、４年目のときは、出張先の病院でかなり大きな手術を二人でやったりして、互いに研鑽していました。私が新潟中央病院の院長になってからは、脊椎・脊髄の外傷が入るとすぐに来てもらい、若い先生方を指導してもらいました。

大島君は私にとって掛け替えのない友人であります。私がどんなことをしていても理解してくれ、励ましてくれた彼の余りにも早い死は私にとって大変ショックであり、心の支えを失ったような気がします。この追悼文を作りながらも彼の顔が脳裏に浮かんできて、話しかけてくれるような気がしてなりません。

「故大島義彦先生お別れ会」で読んだ弔辞を記して（ページ11）、山形大学整形外科教室同窓会の皆さまと共に、このたぐいまれな逸材の死を悼みたいと思います。

大島義彦君の死を悼んで

新潟大学医学部整形外科
中条中央病院院長　**祖父江　牟婁人**

９月７日夜、突然の君の訃報に接しとても驚きました。僕のような不摂生などしない君が何故に60才台の前半で逝かなければならないんだと憤りを抑えきれませんでした。１年有余の闘病生活の後とのことですが、僕は何も知らずにおり、お見舞いの言葉すらかけることもなく今日の日が来てしまいました。最後のお別れの会にも他の止むをえない所用のために出席できず、断腸の思いでこの拙文を書いています。今は幽明界を異にすることになってしまった君を偲び想い出を追ってみます。

我々は共に昭和35年に新潟大学医学部進学課程に入学しました。２年間の一般教養課程を経て４年間の医学部専門課程で基礎および臨床医学を学び昭和41年に一緒に卒業しました。我々が大学に入学した当時は西大畑にあった六華寮の寮生だった君を近くの下宿に住む僕が何度か訪れては青春の悩みや将来の夢を語り合いましたね。

蛮カラな僕と違い君は大人でその思慮深い生活態度に驚き僕自身の幼稚さに気付くと共に多くのことを君から教えてもらいました。我々の大学入学当時は、日米安保闘争の真っ只中にあり国会議事堂へのデモで樺美智子さんが亡くなった年でもありました。今、振り返ってみますと僕などは安保の意味や内容を充分理解しないままに全国的な闘争の展開に付和雷同することも度々あったように思われます。しかし君は当時から確固とした意見と

信念に従って行動していたように記憶してます。６年間の学生生活の後半になると君も僕の近くの下宿に引っ越して来て、それまで以上に頻繁に色々な意味での交友が深まりました。しかし僕のように大酒を飲んで騒いだり連日徹夜マージャンに明け暮れるというようなことはなく、真面目な君は、趣味に囲碁を楽しむぐらいでした。この囲碁には相当に凝っていた様で、囲碁を全くやらない僕はよく解りませんでしたが、一部の友人達の間では君の囲碁好きは有名だったようです。この凝り様は並大抵でなく、後に話をする整形入局後も学会などに出張する列車の車内まで碁石を持ち込む程だったようです。卒業後の１年間のインターン時代は別々の病院でしたが、終了後は同じ新潟大学整形外科学教室の門を叩き同級生から他に３名も加わり計５名が入局しました。昭和41年卒の仲間はインターン制度の不備に反対し全国的にも95％前後のインターン終了者がこの年の春の国家試験をボイコットしました。新潟でも我々同級生は殆どが国家試験を受けませんでした。その結果、医師になるのが半年遅れて当時の医局長だった故石川哲夫先生の出張手配師？　としての仕事に大いに支障をきたし、大目玉をくらったのもなつかしく想い出されます。秋の国家試験は全員が合格して医師免許を獲得しました。その後は、君は会津若松の竹田病院、僕は直江津の新潟労災病院とそれぞれの病院に別れて関連病院での研修が始まりましたが、この関連病院研修中は教室でいっしょになる機会はなかなかありませんでした。再び教室で一緒に仕事をするようになったのは僕がドイツのケルン大学から帰学した昭和52年秋からで、入局後10年が経過していました。帰国してみると君はすでに教室の重鎮であり医局長の大役を務めておりました。我々の入局当時の昭和42年頃はまだ封建的な色が濃く残っていた医局でしたが、昭和52年に帰学してみると前任の松原統医局長や君の努力によって医局内は大きな改革がなされておりました。以前は密室？　で行われていた出張などの人事が白日の下で公平に且つ可能な限り計画的に行われるようになっておりました。医局長として多忙な君ではありましたが、“運動をして身体を動かしなさい”と患者にばかりいうだけでなく、“整形外科医としての我々自身も紺屋の白袴にならないように月１回はスポーツをやろう”と医局内で提案実行したのも君でした。スポーツ好きの古賀良生君や写真担当の斉藤昌文君らの協力のもとにスポーツ整形が名実ともに定着し、病院・医学部合同運動会の男子リレーでもそれまで敵なしで常勝中の外科に勝てるようになったのもこの頃でした。夏は野球や水泳、そして冬はスキーなども一緒に楽しんだものです。週末には津川や赤倉それに山形方面などのスキー場にもよく出かけました。君の奥さんも度々一緒にゲレンデに来ておられましたね。フルスピードで滑り降りた僕がリフト乗り場前でスキー板を平行にし急ブレーキで停止してエッジで飛ばした雪ふぶきを見て“カッコイイ”と言われたのも昨日のように思い出します。

漁船をチャーターしての魚釣りにも何度か一緒に行きました。早朝の海釣りで前日の酒が残っていた僕が二日酔いと船酔いの両方で船べりから海に撒餌（まきえ）をしたのが功を奏したのか、僕の方にばかり魚が釣れたことがありました。僕の撒餌を知らず？　に同じ船のなかで竿を出していた君の方はさっぱり釣れず、“今日は祖父江好みのメスの魚しかいないようだ”と悔しまぎれに言ったのもなつかしく想い出されます。もう１つの想い出は僕が６年間のケルン大学での生活から帰学して最初の冬のことです。ドイツでの寒さに対する住居の対策は万全で、屋外は－10℃を越えるこごえるような寒さでも家の中に入

れば半袖で居ても心地良い程の暖かい生活に慣れてしまっていた僕でした。木造で良く言えば通気性が良いともいえますが、正確に言えば隙間風が入る当時の一般的な日本家屋は、外気の遮断のための二重窓に加えてスチーム暖房が完備したドイツ家屋に比べて極めてお粗末な点が多かったものでした。“家が寒い”と不平をこぼす僕に、君は電気カーペットの良さを賞賛しその使用をすすめてくれました。そのカーペットの上で好きな本（囲碁の本？）でも読みながら“うたた寝”をするととても快適だと教えてくれたのです。今では日本家屋も床暖房が普及し電気カーペットの必要性も余りないと思いますが、当時の日本の畳の上での生活にはとても重宝なものでした。

新潟に居る間に君がやり遂げたもう１つの大きな仕事はなんと云っても教室創立60周年の記念誌でした。これは勿論君だけでなく故田島達也教授をはじめとして当時の高橋栄明助教授や伊藤惣一郎医局長以下教室に居た全員の協力のもとに完成したものであることは論を待ちません。教室初代の本島教授から天児・河野・田島各教授への４代に亘る業績に加えて教室史の編纂には蒲原宏先生の絶大な協力はあったものの教室全員が大御苦労だったことは充分想像できます。この仕事によって教室の業績が散逸せずに一冊の立派な本にまとまり今後も後輩に引き継がれることを考えると教室としてはこの上なく大切で価値の高い仕事であったと云えるでしょう。この業績集および教室史の編纂の仕事に加えて医局長としてのハードな生活がこたえたのか君は慢性胃潰瘍を患い、当時の第一外科教授武藤輝一先生の執刀のもと迷走神経切離術の手術を受けられましたね。術後当初は経過が仲々期待していたようにいかず再三にわたり君は不調を訴えておりましたが、徐々に手術効果が現れたのか不調の訴えも少なくなっていったように思います。

昭和54年になって君は渡辺好博教授が率いる山形大学に転出しました。助教授として山形に招かれたのです。まだ歴史の浅い山形大学整形外科でしたが新潟の整形外科に劣らず新入医局員の教育には力を入れておりました。僕が新潟の医局長であったこともあり、我々二人が中心になって話し合い両大学合同の新人ガイダンスをやろうという話になりました。田島、渡辺両教授の快諾を得た上で、ほぼ中間地点に県立瀬波病院がリウマチセンターを新設した折でもあり、このセンターの施設を借りて合同のガイダンスを数年間に亘り行いました。このガイダンス自体は準備して行う側の我々にとっては非常に大変でしたが、新入医局員からはとても感謝され、今でも当時の新人達から大変良かったという言葉が聞かれます。これも良い想い出です。その後は君は脊椎外科、小生は股関節と主たる研究分野が異なることもあり頻繁に会う機会はなく、たまに日整会などで顔を合わせる程度でゆっくり話をすることもなく時が過ぎてしまいました。

今は、話をしたくても出来ない世界に旅立ってしまった君ですが、今頃は天上で脊椎の患者さんを診察しているのでしょうか？　好きな仲間と碁石を打っているのでしょうか？とにかく君のペースで好きなことを好きなようにやって下さい。僕の方は院長としての管理職がどうも性に合わず、いまだに手術場での仕事の方に興味がありメスを措くことができないで居ます。もう少し臨床を続けたいと考え、まだまだ努力もする所存です。どうか天上より見ていて下さい。

合　掌。

大島義彦先生を偲んで

すだ記念整形外科
（元山形大学医学部整形外科助教授）　須　田　昭　男

私が山形大学医学部に赴任したのは昭和51年７月ですので、開講間もない頃です。当時、渡辺教授、茨木助教授、私、佐本の４名でスタートし、翌年、三浦、浜崎、村田、原田が加わり、昭和54年に待望の山形大学医学部第一期生７名が入局しましたが、茨木先生が琉球大学医学部教授に就任されたため、大島先生が新潟大学から茨木先生の後任としてこられました。大島先生は自ら、三ヶ月間、初代医局長として医局制度の確立、教室誌の創刊など教室運営のシステム作りに着手し、関連病院の拡大充実、脊椎研究班の発展、バングラディシュへの医療貢献、山形県のスポーツ医学への貢献など精力的にご活躍されていた頃を思い出されます。特に印象に残っていることは、先生はいつも「教育は動機付けが大切」と言って、楽しそうに学生や医局員の教育に当たっていたことです。

ご存命中は大変お世話になりました。ご冥福をお祈り申し上げます。

兄　　貴　　へ

済生会山形済生病院院長　浜　崎　　允

私と大島先生との思い出は、多すぎて大きすぎる。

私にとって大島先生は、先輩であるが兄貴としてお付き合い頂き、本当に感謝しています。兄貴がいなければ、今の自分もなかったと思います。

いつも常識を否定し、新しい観点から物事を考える。そして、行動を起こす。私達は、それに引っ張られてここまでまいりました。

大変な事もありましたが、楽しいことも多々あり、何となくうまくいっていたように思います。

大島先生自体、大変純粋な心の持ち主でした。逆に、それが他人に受け入れられなかった事もあったようです。

私と大島先生は、一度の諍いもなく、楽しい時を過ごさせて頂きました。

大島先生のアイデアを多く頂き、山形済生病院は、他の病院と少し違った施設として発展しています。

健康増進センター「めぐみ」、サービス棟の「介護福祉用具展示センター」、現在建設中の「PET施設（Positron Emission Tomography）」等々。

また、バングラデシュの「山形ダッカ友好病院」は、大島先生の意志を引き継ぎ、今後は更に発展させていきたいと考えております。

大島先生、本当にご苦労様でした。

そして、これからも見守っていてください。「大島先生ならどう考え、どう行動するか。」、いつも考えながら、今後も仕事をしていきたいと思っております。

大島義彦先生との思い出

済生会山形済生病院院長　浜　崎　　允

私が、新潟大学医学部整形外科教室に入局したのは昭和47年でした。その時、大島先生は６年先輩で、脊椎班として、亡くなられた皆川泓義先生などと活発に仕事をしておられ、自分にとっては憧れの兄貴といった状況でした。

山形の地に山形大学医学部が発足、新潟大学から渡邊好博先生が教授として赴任され、私もお手伝いとして移りました。助教授であられた茨木邦夫先生が、琉球大学医学部整形外科の教授として栄転された後の助教授を是非大島先生に来ていただき御指導をお願いしたく思い、私の同期生であった佐本敏秋君と一緒に色々運動した思い出が残っております。結果、昭和54年７月16日、山形大学医学部整形外科助教授として赴任していただき、一緒に仕事が出来るようになりました。

仕事では、種々の学会で多くの報告もされていますので多くは述べませんが、「大島式頚椎拡大術」をはじめ、旧態依然とした考えに固執することなく、いつも斬新な考えを取り入れ検討をされており、私達はいつも啓蒙され、勉強をさせていただきました。

私は、一応股関節外科を専門にしてきましたが、先生の考え方に触発され「日本人に合った人工股関節を作ってみよう」との発想に立ち、YU式（Yamagata University）人工股関節を作りましたが、当山形済生病院だけでも年間200例近くの人工股関節に使用しています。

さて、学問的な事はさておいて、大島兄貴との懐かしい思い出を述べてみたいと思います。

まずは趣味。大島先生は囲碁が大変上手でしたが、私と佐本君はへぼ将棋が大好きで、いつも駒をならべていました。それを見て大島先生が敢然と勝負を挑んでこられました。結果は、私達の巧妙な業（？）に連敗を重ねることとなりましたので、大島兄貴は、かなり悔しい思いをしたことと思います。ところが数か月後にはめきめきと腕を上げ三巴の状態となり、その後は一進一退の状況で現在に到っておりました。多分かなり勉強されたことと推察しております。正月には、大島家で、酒を飲みながら（先生はお酒を飲まれませんでしたが）将棋を指すなど楽しい思いをさせて頂き、本当に有り難うございました。

次はスポーツです。先生はこの方面は得意でないと思っておりましたが、医局の野球メンバーに入っていただいたところ、昼休みは殆ど投球練習、夕方にはグランドで守備・バッティングを頑張られ、医局対抗野球では、渋い右打で出塁され、すぐに盗塁を敢行（皆様信じられないかもしれませんが、意外と足が速いのでした）、チームの勝利に貢献され皆で大いに盛り上がったものでした。

話は変わりますが、大島先生は発展途上国であったバングラデシュの医療に心血を注がれておられました。ここで、山形ダッカ友好病院について、大島先生がご自分でお書きになった文章を紹介したいと思います。

「バングラデシュ国での医療支援事業」　　大　島　義　彦

【経緯】

Mohammed Ekhlasur Rahman氏は1992年山形大学医学部大学院博士課程（整形外科学）に入学し、４年間にわたる研究生活の後、1996年（平成８年）に医学博士号を取得した。途上国の通例では、祖国においてめでたく錦を飾り、それ相応の地位を保証されるのである。Rahman氏の夢は祖国バングラデシュにおいて病める人々のために日本で学んだ先進医療を実施することであったが、彼には帰国しても診療活動を行う場がないとのことであった。仕方がないので、アメリカ合衆国へ渡り整形外科学の臨床トレーニングを受ける予定であるという。我々、当時の山形大学整形外科およびその関連病院の医師（山形整形外科学学術研究振興会）はバングラデシュの事情に十分な理解は得られなかったがダッカ市に診療所をプレゼントすることにした。そしてポケットマネーを出し合い500万円集めた。

我々は、発展途上国に対して、我々の出来る範囲で医療支援をすべきであると日頃から考えていた。近年、発展途上国から多くの若者が留学してきている。エクラスル・ラーマン氏はこれら並みいる留学生の中で、際だって有能で、高い志を備えていた。我々のバングラデシュ支援のきっかけは、ラーマン氏との出会いである。彼であればバングラデシュの医療改革のリーダーになれる人材ではないかと考えたからであり、そして、彼の純粋で、暖かい人柄に触れた多くの山形の人々が、彼の厚い思いに対する支援の申し出が多く寄せられたからである。

そして、1996年（平成８年）７月６日から12日にかけて、６名（山形大学整形外科助教授大島義彦、同医局長林雅弘、済生会山形済生病院院長浜崎允、山形県総合療育訓練センター所長佐本敏秋、寒河江市立病院院長佐藤政悦）からなるバングラデシュの医療状況調査団を派遣した。その後、関係各位に協賛を呼びかけたところ、医療機器メーカー、医師、ライオンズクラブ、一般市民などから様々な支援が寄せられた。これまでに寄せられた医療機器（中古または新品）などは送料、関税を含めると、定価ベースで１億円を上回る額となった。

病院はダッカ市の中心部、国会議事堂の近くの建物を借りて建設することになった。病床数は20程度で、整形外科を中心として他の内科外科、産婦人科などは非常勤で診療。名称は設立経緯を取り入れ「山形ダッカ友好病院」とした。1997年（平成９年）３月１日から殆ど器材がないままにオープンしたが、本格的には医療器械の最終整備後の８月から診療開始となった。ラーマン博士は山形で医療を修め、人口1000万人余のバングラデシュの首都ダッカ市に、わが国の先進的医療のモデルとなる、山形ダッカ友好病院を設立した。地元では「山形病院」と呼ばれ、人々の信頼を得つつある。しかしこれらの活動はほんの端緒についたのみで、困難な課題が山積みしている。とりわけ、これらを担う人材の養成が急務である。

これらの事業を推進してきた山形整形外科学学術研究振興会は1998年（平成10年）に法人化され、社団法人山形ヘルスサポート協会となった。

【バングラデシュ医療支援の目的】

我が国は長期にわたる鎖国より、欧米諸国から大きな遅れをとった。そして明治時代に

なり国創りに燃える若い精鋭が先進国から多くのものを学んできた。勤勉な日本国民は第二次世界大戦の困難を乗り越え、曲がりなりにもそれなりの近代化を達成した。そして、現代では日本は発展途上国に対し、巨額の国際貢献をなすに至った。発展途上国に対する支援は如何にあるべきか。富める国が貧しい国に物資を供与したり、先進国の医療チームが、途上国において慈善医療を行っても根本的解決は得られない。それどころか逆にその国の自立を妨げることになりかねない。バングラデシュの課題は、バングラデシュの人々自身が主体的に取り組むことなしには決して達成されない。

我々の活動の目的は、有能で高い志を備えたバングラデシュの人々の教育を通じて、我が国の先進的医療、およびそのシステムに関する知識、技術を供与し、それをバングラデシュへ移植することによってバングラデシュの医療レベルを向上させ、バングラデシュの人々の幸せに貢献することである。そして更に重要なことは、移植された医療はバングラデシュにおいて自己増殖していかなければならず、そのためのシステム、環境整備、そしてアフター・ケアが肝要である。

以上により、1997年７月、山形ダッカ友好病院の開院となった。

大島先生は昨年12月初め、当院で勉強会があった際に、すでにColon Ca.の肝転移があると、当方に話されました。３か月前のCTでは、何もなかったのにとのことで、私は何も話すことが出来ませんでした。当院の外科Drと奥様の大島扶美先生の検討で、Chemo Therapyを開始、今年３月19日Colonの狭窄部の切除を行いました。その後も闘病生活を頑張られ、７月18日ラーマン君が来日した際、自ら車を運転して、ラーマン君を自宅につれて行き、八百屋で買い物をしてバングラデシュ式カレーを一緒に食べられたそうです。

しかし、８月31日夕方、急に意識状態が悪くなり、当院に来院。９月７日永眠なされました。

大島先生がCarcinomaと分かって、私も迷っていたPET（Positron Emmision Tomography）の施設を建築することを決心しました。現在、工事を始めており来年５月には開院の予定ですが、この施設に先生のお名前をいただき「Yoshihiko Memorial PET Center」として、地域の皆様の健康に一役果たさせていただきたいと考えております。

大島義彦先生を偲んで

小白川整形外科クリニック　佐　本　敏　秋

大島先生が突然診療所を訪れ、他人事のように、自分の病気についてお話になり、驚くと同時に気が抜けたようになりました。それでも、教科書を紐解き、疾患名から比較的予後が良いとの記載もありましたので、多少の期待をもっておりましたが、およそ８ヶ月の治療の後、ご他界されました。

先生らしく殆ど在宅で過ごされ、体調の良い時には農業もされ、トマトも頂きました。癌に特有の疼痛に対し、硬膜外チューブの挿入によるブロックが有用であり、今後の在宅癌患者にとって有効な武器になると身をもって実践されました。

大島先生が他界され、３年目を迎えようとしております。偲ぶ会を迎えるにあたり、あらためて先生を思い返してみました。

先生との出会いは、新潟大学整形外科医局でした。松原医局長の後任で医局長を勤められていたと思います。

入局２年間のうち、半年は東京での研修でしたので、あまり新潟大学整形外科医局の印象はありませんが、先生が脊椎班として外来で筋電計を黙々とされていることが思い出されます。

昭和51年４月、山形大学整形外科発足と同時に、卒後４年目を迎えた私が、山形大学の脊椎班を仕切る事となりました。（班といっても私一人でしたが）

当時、故皆川先生と大島先生が新潟大学の脊椎班を背負っておられました。解らぬ症例がある度に、113号線で新潟へ往復し、大島先生始め脊椎班の方々の教えを頂きました。

茨木助教授が琉球大学整形外科教授としてご栄転され、後任として、大島先生に山形へきて頂けるよう浜崎先生（山形済生病院長）と頼みに行き、快諾を受けた事がつい最近のようです。

先生は先を読むというのか先見の明に優れ、行動力があり、後について行くのが、やっとでした。

時にはその時代には受け入れが困難なこともあり、後の処理に苦労したこともあります。

脊椎関係では、ルーキーロッドに溝をつけて、ロッドの滑りを少なくして固定性を増す方法、頚椎症性脊髄症に対する大島式頚椎拡大術の考案、スポーツ医学・ポリクリの為の蔵王診療所の開設、レセプトコンピューターからの患者情報検索、医局に振興会発足（みなし法人格）、などです。

教室改革では、医局長の公選、協力病院の開拓、患者中心主義で情報の公開の徹底等の指導を受けました。

ポリクリの指導も熱心で、教室員が100名を超え、教室が隆盛を誇れたのも、先生の貢献が大であったと思います。

山形大学看護学科の教授として、看護婦の教育、更に、県立医療短期大学の理学療法学科長として、リハビリテーションの分野でもご活躍になりました。

ご功績については書き出すと切りが有りませんので、この辺で筆を置きますが、家庭菜園をしている時、船で釣りをしている時、患者を診ている時など、折に触れ先生を思い出します。先生ならどうするか、どう判断するか自問自答しております。

早く公務員をやめて病院を設立したいと言っておりました。計画内容を聞き、当時は整形外科医不足、看護婦不足の状態でしたので、困難であること、先ず有床診療所から始めては如何かと話しました。少しさびしそうでした。特老の開設の話も有りましたが、結局、本格的にメルヘン（奥さんが経営している福祉医療総合施設）の経営に参加しようと考えていたようです。心残りはいっぱいあったかと思いますが、病気療養中は、穏やかで、淡々と過ごされていたように思います。兄貴を失った想いです。

先生から頂いた、多くのご厚情に感謝申し上げますと共に、ご冥福を心からお祈りいたします。

大島義彦先生とみゆき会病院

特定医療法人みゆき会理事長　原　田　順　二

大島義彦先生を偲び同窓会会誌に初投稿し、哀悼の意を表します。

私は、昭和51年４月、福島医大麻酔科を終えた後、山形大学に入局するつもりでした。しかし、山形大学の医局が、まだ開設されておらず、新任の渡辺好博教授が新潟大学整形外科出身で、会津中央病院が、新潟大学の重要な関連病院でしたので、山形大学に入局後、好都合であることなどの理由で会津中央病院整形外科に一年間お世話になりました。その年の10月、私が、院長室の前を通りかかったら、星院長のいつものどなり声が聞こえ、また、ストレス解消をやっているなと思いながら通り過ぎましたが、その時の院長の相手は、当時、新潟大学整形外科医局長であった大島義彦先生であることが、後でわかりました。少しの時間でしたが大島先生から話しかけていただき、たいへん感激したのを覚えております。そのとき、正直いいまして、会津で大島先生と初めてあった５年後に、まさか、ご一緒に仕事をすることなど、全く思ってもみませんでした。その後予定通り、53年４月から、山形大学整形外科にお世話になりましたが、昭和55年１月に、家庭の事情で、大学をやめ、兄と一緒に病院の経営をはじめました。そのころ山形大学に助教授として大島先生が赴任しました。当時山形大学整形外科の病床数は32ベッドで大学病院として大変少ないベッド数で、このままでは、本来の大学の使命を果たすことが出来ない危機感をもちながら、渡辺教授、大島助教授はじめ、医局総動員で各地区に関連病院をつくるため、また、充実させるため、かなりの力をいれておりました。一方、上山市には、市立病院もなく、チーム医療したり、完全看護のある、まともな病院もなく、医療の過疎地帯ともいわれておりました。大腿骨頚部骨折など、付き添いの必要なかたは、たいてい、山形市内の医療機関に搬送し、手術をしてもらいました。私は、開業後６～７年間、こういうジレンマのなか、上山市に完全看護で、チーム医療を行う、また、上山市の患者さまが、山形市に行かなくても治療のできる設備と人員をそなえた医療機関を開設し、医療の過疎地帯を出来る限り解消したい気持ちになってきて、医局で大島先生、浜崎先生、佐本先生たちが、将棋をして楽しんでいる最中に、現状を説明したり、相談したものです。昭和61年春に、病院開設を決心し、渡辺教授、大島助教授に、ひと、もの、かね、すべてに全面的なご支援をおねがいいたしました。山形大学が、関連病院を増やしたいにしろ、今考えても11億の借金を抱えようとする一民間医療機関の設立に全面的に援助することなど全く考えられなかったことでした。しかし、大島助教授が中心になり、上層部をまとめ、病院設立のため本当に努力をしていただきました。債務保証もしていただきました。医局支援の承認をいただくための医局総会もしていただきました。そして、優秀な整形外科医師も派遣していただき、蔵王みゆき病院（現みゆき会病院）は平成元年６月に開設することができました。開設後大島先生のアイデアからヒントを得て事業をおこしたり、またいろいろな方からご援助していただき開設して15年たった現在では、完全看護で、チーム医療をおこなう病院、山形大学の関連病院、地域の救急病院、そして、地域に密着した医療機関として、上山市になくてはならない病院として認められるまでになっております。大島先生の力がなけれ

ば、現在の、みゆき会病院は、なかったものと、おもっており、大島先生には、いくら感謝しても感謝しきれない思いです。

Dr 大　島　の　こ　と

みゆき会病院　太　田　吉　雄

大島Drに初めて合ったのは、彼が新潟の医局長をしていたころでした（小生が学４で入局先を整形にしようかなと思いはじめた頃です）。昭和50年ですから、大島先生も卒後９年ほどのころでした。そこは、知る人ぞ知る田島教授（知らない人は歴史の勉強をしてね）主宰の教室です。教授は就任６，７年目で、教室は、清新のエネルギーとでも言うものに満ちているようでした。そういう教室の医局長ですから国の内外からの諸事の調整やら臨床に研究指導に大活躍でしたね。そこのポリクリで大島Drの話しを聞きました。卒業生に対する特別な医局説明会や勧誘はどこの医局もほとんどなく、そういう事はポリクリの中で話されたとおもいます。大島先生は整形外科医学のほか、やはり色々話してくれました。ひとつ憶えてるのは、自分自身は整形か精神科かどちらを選ぶか迷ったと言う言葉でした。大島Drは、皆様御存じの通り、実践家であり起業家です。精神科はやや意外でしたが、なるほど、とその後合点が行くのは、氏が頚肩腕症候群や、わけの分からない神経症状を、良く言えば追求し、言い方を変えれば、ああでもない、こうでもない式の非効率的な事もやる、そういう点を見てからでした。

病棟では神経難病や頚髄悪性腫瘍の患者さんを鉄の肺に入れて、末期をみとってもいました。蛇足ですが私は、山岳部でいささか活動していて、ほとんど自分の希望で、一部クラブの要請で2，3年後カラコルムヒマラヤ（パキスタンにあります）へ学術登山隊隊員として３ヵ月ほど行く事にしていまして、入局前に、部の顧問の先生が大島医局長と話しをつけてくれていました。後になってみれば山形県立中央病院勤め時代（当時は新潟大学の関連病院でした）に行ったのでした。私も医局長職をかじってみましたが、大島医局長はそういう勝手な希望を出されて面倒だったとおもいます。ただできるだけ手助けしてやろうとの気持ちはいただきました。その後そういう誘いによりDr結城、大類、尾鷲がネパール、中国へ行きました。

研究については、県中のDr小嶋式の腰椎間板ヘルニア手術、即ち広範椎弓切除±ファセテクトミー術後の脊椎安定性（不安定性）について指導を受けた事はわすれられません。経時的な安定性の変化を見たいので10年の間隔を置いて２回調査しました。臨床的な調査なので元の患者さんに来てもらうのが一苦労（手紙だけじゃダメで電話かけまくり）、で100人分くらいのレントゲン計測。そこまでは要するに単純労働だったのですが、さて２回の調査をどうまとめるかがわからない。そこでDr大島のサジェッションは、１人で２回とも調査できた人は異なる時間経過の２人とせよ。何故こんな事気付かんのか、我ながら情けなし。そうして並べていくと、例えば電気信号を加算していくとぼんやりとした波がしだいにはっきりするように、腰椎の異常可動性と辷りの出現パターンがきれいにでました。これで形がつきました。これを始めての国際学会で発表して会長からお褒めの賞と金一封

もらいました。Dr大島に半額以上さしあげるべきところ、自分１人で使わせていただきました。

他にも研究でお世話になったり、しごかれたり、いじめられた（と思ってる）人が少なからずいるとおもいます（Dr大島は、特に無理しての発表などはすきでなかったので、あまり発表だの論文書きはしつこく尻叩かなかったね）。世話になった筆頭はDr林かな。１つ斬新だなーと感嘆したのは（他にも一杯あると思うけど）、Dr長島＆Dr大島の転移性脊椎腫瘍手術術後の評価法です。大方の評価がNSAID、麻薬、等で対処できるか否か程度の評価だったと思いますが、彼らの評価には巧みに術後経過期間を組み込んだ簡単ではないが重厚なものでした。頭の使いようで新しいものが見えるんですね。臨床整形外科の推薦論文になりましたよね。

次ぎにGrod、これもエレガントなアイデアだと思います。一時期を画しました、しかしその後のインストルーメントが先か患者さんが先か分からんような時代の流れと大資本の物量作戦にはいかんともしがたかったと思います。

今、民間企業にいて思いますが、やってみてから成功か失敗か分かるというような不透明な事は原則としてやりにくい。もちろん経済的な損失や評判を落とす事がなければ失敗となっても、そのチャレンジ精神は大いに鼓舞せねば生き残れない。本物の経営者はある事業がうまく行くかどうかデータを超えて嗅覚で答えが見える者を言うのだと思ってますが、この点からはDr大島は（おそれながら渡辺名誉教授も）突っ走りのドンキホーテ的な所があったね。Dr大島にはおこられるかもしれんけど、最終的には店じまいした蔵王診療所とかね。

私のような小人は年をとって先が見えると、おもしろき事もなきこの世をば……、と嘆くだけだけど、彼はこれとは無縁だったとおもいます。この辺で終わります。

大島先生あっての寒河江市立病院

寒河江市立病院　佐　藤　政　悦

大島先生は、いつも15年、20年先を見据え果敢にそして忙しく行動されていました。しかも常に夢を持ち、また楽天的に。ただ、先が見えすぎて、我々常人が理解できる範囲を超えてしまうことも、しばしばでした。しかし５年10年と経つにつれ、その発想のすばらしさが漸くわかり、世の中の変化を先取りする、その予見性のすごさに驚かされました。現在の寒河江市立病院は、リハビリテーションがよく整備され、整形外科の充実した病院として市民に認められています。ここにたどり着くまでには、約15年の月日を要しました。顧みると、約20年前、当病院は60床で全く元気がなく、市民に忘れ去られたような状態にありました。それをどのようにして活性化するか、対策を立案するのは並大抵ではありませんでした。町はずれの田圃の中にあり、しかも交通の便が悪く、小規模ゆえ高度医療など望めない病院。その時、大島先生は病院再生計画の中心に、リハを据えました。そして、数年を経てリハの重要性が語られ始めたとき、当院のリハは順調に推移し、県内で最も早く施設認定基準をクリアすることが出来ました。また、MRI が出始めた頃、その有

用性を説かれ、早く市立病院に入れるべきであることを促されました。しかし、院内の設置場所や資金の問題などで、のろのろと導入までに時間を要してしまいました。ところが、いざ入れてみるとその使用頻度の多さ、病院に対する市民の信頼度の向上など、私の予想を遙かに上回る効果でした。10年以上も前に勧められたのに、と今更ながら反省するだけです。他にも、学生の教育実習のやり方、地域の調査研究のことなど、先駆的なものが多く思い出されます。

さて、大島先生に最初にお目にかかったのは、私の学生時代にさかのぼります。学四のポリクリで、ミニレクチャーと称して病棟のカンファランス室で、脊髄造影の読み方を講義して下さったときです。黒板に絵を描きながら、リズミカルそして元気よく話してくださった姿が思い出されます。もう26年にもなります。私は卒業後すぐに山形に戻りましたが、その２年ほど後に大島先生が来られました。初期研修で、ゆきわり整肢学園、河北病院、南陽市立病院を廻ったとき、運良くいずれの病院にも大島先生が指導に来てくださいました。いつも、早く１人前になれよと、病棟や手術をどんどん任されましたが、内心はらはらすることが多かった事でしょう。本当に感謝しています。また、その頃はまだまだ医局員が少なく、勤務先は良くて２人、殆どは１人医長でした。夜間に重症患者が来れば、すぐ大島先生の自宅に電話し、先生に人手を手配してもらい、緊急手術をやることもしばしばでした。そんなときは本当にありがたく、頼もしく思いました。研修６年目の昭和59年、郡山の病院から山形に戻る際、寒河江市立病院に行かないかと声をかけられました。地域医療に興味があったことから、すぐその話しにとびつきました。但し、ひどく落ち込んだ病院で０からの出発ではなく、大きくマイナスからの出発ですよと追加文がありました。市立病院は西村山郡になくてはならない病院だから、一緒にいい病院にしようと、持ち前の情熱を込めながら話されたのが、つい先日のように思い出されます。

赴任してみると確かにすごい病院。病棟は老人保健施設のようで、整形の外来は１日10～20人程度しか来ません。それまで廻った病院の中で最悪の出発。病院再建の為に、どの様に手当てしたものか思案に暮れる日々でした。そんな時大島先生いわく、きちんと良い診療をやっていけば、出だしは悪くともいずれグッと良くなるからと、いたって楽天的におおらかに構えておられました。但し、打つべき手はしっかり手配してくださいましたが。大島先生の予想通り、２年ほどで病棟・外来とも混み合い、入院は予約待ちの状態までになりました。病院の運営が軌道に乗ってくると、まもなく増床の話が持ち上がり、H元年には160床へとトントン拍子に増床が決まりました。そのときに当然のごとく、何を病院の目玉に据えるか、の協議がもたれました。そこで、リハビリテーションの重要性を説き、病院発展の目玉に据えるように寒河江市に計ったのが大島先生です。現在の病院の体制が、そのとき決まりました。我々はその敷かれたレールをひたすら走り、現在の市立病院の発展を得ていますが、レールが別の方向に向かっていたら、病院に対する市民の信頼は勝ち得なかったでしょう。

あれから15年以上が経ち、医療環境が変化し、また、病院の進む道を修正あるいは再構築すべき時期が来ました。さらに、寒河江の近隣の町との合併の問題も絡んでいます。市立病院は新たな曲がり角に指しかっかっています。しかし、私には今後進むべきレールをどのように敷くべきなのか、なかなか先が見えません。自分の先見力のなさに落胆しつ

つ、改めて大島先生の存在の大きさに驚きます。大島先生は、今の病院発展の最大の功労者であり、先生なしでは市立病院は語れません。

さて、大島先生は、最後は癌性疼痛との格闘を余儀なくされました、そんな中で、麻薬と持続硬膜外ブロックとの効果の比較を体験されました。麻薬は思考力の低下を招いてしまうことや吐き気など副作用が少なからずあるが、硬膜外ブロックは除痛だけに留まり、かつ効果も良い。従って、ターミナルの時はまず持続硬膜外ブロックを優先的に使うのがよい、とおっしゃっておりました。是非このことを、みなさんに勧めてくださいとのメッセージを頂いております。もし、そのような機会に合ったときには是非検討してみてください。

最後に、大島先生のご冥福をお祈り申し上げ、思い出の言葉といたします。

大島先生の思いで

公立置賜総合病院整形外科医長　林　雅弘

大島先生は昭和54年に山形大学に助教授として赴任されてきました。以後ご逝去されるまで、私は常に大島先生に見守られながら過ごしてきたような気がします。その時々に大島先生が教えてくださったことを思い出しながら、私なりに24年間を振り返ってみたいと思います。大島先生の教えの幾つかを此までも後輩に伝えて来ましたが、これを機会に少しまとめてみたいと思います。

大島先生が着任当時、学生だった私の最初の思いでは、昭和55年の12月の卒業試験に大島先生が出された問題でした。「脊髄障害の分類とその内容について記せ」といったような内容であったように記憶しています。

手術や研究編

その次は無事卒業し、整形外科に入局し医師国家試験に合格し医師免許の番号が記入してある葉書がついた、昭和56年５月下旬でした。この日に山形済生病院で腰椎後側方固定があり、私も先輩について手術に助手として入らせてもらいました。この手術の最中に大島先生に医師免許の葉書が来たことをお話ししたら、「林君もこれで医者になったのだから、メスを持てますね。」といって、採骨の時に執刀させていただきました。手術をしながら大島先生は「*助手に入るときには、いつでも執刀できるように準備をしておくこと。術者に何かあったら助手がその後を継いで手術を行わなくてはなりません*」と言われていました。

そのように言われて実際にすぐにメスを持たせてもらうと、「次もあるだろう」と、勉強し、準備するようになります。また大島先生はよく「*手術は技術である。だから早くから修得しておく方がよい。*」と言っておられました。「*本当に難しいのは神経所見の取り方や、手術適応の判断です。この修得には時間がかかります*」と話しておられたのを思い出します。これは言うのは簡単でも、実際に実行するとなると自分が行えば２時間で終わる手術を、４－５時間かかってもじっと助手をしながら指導することは並大抵のことではありません。しかし大島先生は実行されていました。私に関して言えば、２年目で胸椎の前

方除圧固定、頚椎の前方固定、腰椎後方手術、３年目で腰椎前方固定術等、早い時期から色々な手術を指導していただきながら、執刀させてもらいました。このように教えていただいた事をその後は、私が後輩を指導するときにも行っています。

10年目くらいで大島先生に助手で入っていただいた靭帯骨化症の手術の時に、慣れてきたのか私はどんどんと骨を削って除圧を進めていたら、たぶん大島先生は慣れがでてきた私の手技をみて少し危ないと思って注意されたと思うのですが、実際には大島先生は「林君、君が安全だと思って手術していることはよくわかるが、*私を（大島先生を）安心させるために、もう少しゆっくり削ってみてください*」といわれました。その後に私は余裕を持ってゆっくりと最後まで安全にその手術を行いました。「*自分の手術は自分がやるだけでなく、見ている人がいて、その人が後日手術を行う時に影響を与えるかもしれないので注意が必要だ*」とその時に気づき以後大学在任中は実行してきました。その間に私も後輩の助手をしながら大島先生の感じたことと同様にゆっくり手術をして欲しくて、大島先生の言葉を借りて「私を安心させるためにもう少しゆっくり削ってください」と言ったことが２回ありました。２人とも優秀な手術手技を持った脊椎外科医になっています。

手術に関してはもう一つ「*手術が終わったら、その手術の反省をし、次に同じ手術をするならどこを直したらよいか考えて、話し合うことが大事です*」と言っておられました。「*全く反省することのない手術など無い。（もしあったらその手術はもうしなくても良い）*：これは私の解釈です」と言うことも言っておられました。

神経症状の所見の取り方も大島先生から指導を受けました。大学に戻った５年目の時に大島先生の隣で診察をし、反射のとりかたや、知覚障害の診察の仕方を教えてもらいました。筋電図の検査法方も大島先生から教えてもらったことの１つです。「*診察をしながら考えて診断し、もう一度その診断に合うか診察を行う。診断がつかない患者さんには１時間でもかけて診察する。*」そうゆう姿勢を見せていただきました。紹介状の返事には必ず大島先生がとった神経所見のコピーをつけていました。これがみたくて紹介する先生方も多かったのでは無いでしょうか。

私が河北病院にいた４年目の時に寒河江にパートで来ていた大島先生から筋電図の依頼があり、色々な患者さんの筋電図をさせていただきました。時に患者さんと一緒に来て「*筋電図検査中の音の取り方が重要とか、安静時の所見も重要*」とか教えていただきました。

学会発表については卒後５年目の昭和60年に山形県の胸腰椎損傷の調査を行いました。この時の研究計画のたてかた、調査用紙の作り方、実際の調査の方法とその後のまとめ方まで指導していただき、その成果は昭和61年３月に日整会のパネリストとなり金田教授やKostuck教授と同じ壇上で発表させていただきました。きちんと調査研究すれば日整会にも採用してもらえるのだと自信がついた時でした。研究計画では「*優れた臨床研究のテーマは日常診療の中にある*」と言うのが先生の口癖でした。外来でも病棟でも手術でも臨床をきちんと行い、その中で出てきた疑問点をよく考えてその疑問点に対する答えを出そうとする研究の基本姿勢を教えてもらいました。調査を行う前によく話し合い、問題点をはっきりさせ、その問題点に対してどのような項目を調査すのか、調査には調査票を作りそれを埋めていく方法をとる。といった研究手法も教えていただきました。

人柄編：

診療・研究面だけではなく、大島先生のお人柄に関するエピソードも幾つか紹介いたします。大島先生に韓国やインドネシアの学会へ一緒につれていってもらいました。「*どうせ行くならみんな演題を持っていきましょう*」と韓国でもインドネシアでも参加者はほぼ全員で発表しました。初めて参加した国際学会の韓国ソウルでは太田先生が学会賞をもらい、参加者から祝福され同席した私達もとても名誉な気分になりました。「国際学会って良いな！」と言うのが最初の感想でした。

２回目のインドネシアのジャカルタでは、到着した次の日に町に１人で出かけて行って、大学を卒業して仕事の無い英語を話せるガイドをつれてきて、「ガイドを雇う！」と言って、一日約3000円くらいでショッピングモールや、地元の人が行くレストランに連れていってもらいました。夜になったら「キャバレーにつれていってくれ」と私たちが言うと彼は行ったことがないので分からないといっていました。真面目な良い人だったのですね。そのガイドとはその後手紙を一度もらい日本に来たいと言っていましたが実現はしませんでした。学会発表をすませて帰国の途中にバリによったのですが、ここで我々はホテルのプールでのんびり昼寝やカクテルを飲んでいましたが、大島先生は「じっとしていることはできない」とタクシーをチャーターして、標高4000mのキンタマーニ山に行き、その帰りに皮ジャンパーをオーダーメードで作ってきていました。とにかくじっとして其処にとどまっていることが嫌いな先生でした。

大島先生は脊椎外科の指導者であると同時に医局のスポーツの推進者でもありました。50才を越えても野球のピチャーに意欲を燃やし、「50才を越えても球速は速くなれる」といって練習をしていました。よく「林君を三振にとりたい」といっていました。幸いなことに大島先生からは三振はありませんでしたが、何回も凡退にとれらてしまいました。保健医療大学に行ってからは野球を一緒にしたことはありませんでしたが、練習は続けていたのでしょうか？　看護学科の教授時代は整形外科にいたときよりももっと野球の練習をしていたようです。

大島先生にも弱点？　があります。私が知っている限り、朝が弱く、夜に強いことです。特に夜の強いことといったら…。学会前には夜の11時くらいから予行や検討を開始し、朝の４時５時になるのはしょっちゅうでした。大島先生は粘り強くご指導してくれるのですが、私の方はもう眠くて頭が働かなくなってくることもありました。なるべく早くから指導してもらいよう以後は気をつけています。大島先生ご自身はぎりぎりまで完全を期すのか、よく学会場でも発表原稿を手直しされているの見かけました。

大島先生はユーモアのセンスもあり、その場を和やかにしてくれる一面もありました。私が１年目の冬に当時婚約していた妻の菜子が大島先生と初めて会ったときに、「林君と同級生の大島です」と言って自己紹介をして、妻もそれを信じた事があります。実は15歳年上の助教授だと言うことを説明してもにわかには信じがたいようでしたが、最初から助教授の大島ですと自己紹介されているとかえって緊張してしまったところを、その場の雰囲気を和やかにしてくれました。

外来が込んでいると私の予約患者さんもよく見てくれました。私の知人もその一人で、後でその知人から聞いたところでは「林先生は良い先生だけれども、私も良い医者なんだ

よ」と言っていたとのことでした。誰がみても良医・名医の大島先生からその様なことを言われると患者さんも和んでしまうとのことでした。

これ以外にも裁判所の鑑定書の書き方や、病院経営、教科書の書き方など思い出はたくさんありますが、私だけ紙面を占領していまうわけにもまいりません。この辺で終わりにさせていただきます。

本文中の大島先生のお言葉は私の記憶の中のもので文章にされているものではありません。もしかして大島先生の実際に言われた言葉と違う事もあるかもしれませんが、お許し下さい。

最後に先生の弟子達がこの山形の地にしっかりと根を生やし、先生の教えを次の世代にも伝えております事をご報告し、ご冥福をお祈りしてこの文章を終わります。

大島義彦先生を偲んで

山形県立保健医療大学　伊藤友一

大島先生の訃報が届いてから一カ月余りでこの原稿を書いております。大島先生は、常に10年先、20年先を見据えて行動されておりました。その理想が大きい故に、時には誤解されたり受け入れられなかったりしましたが、苦しい胸の内をあかさずに自分の描いた目標に向かって進んで行かれたと思います。今、盛んにいわれているインフォームドコンセントについても私が入局した当初から当たり前のように実行されておりました。十分な時間をかけ患者さんに病態や危険性につき良く説明し、その内容をカルテに記載する。患者さんにいくつかの治療法を呈示し、その中から選択して貰っている。そのような姿を拝見したため、いつの間にか同じような説明と同意を行うことが身に付いておりました。10年ほど前の教室誌に“インフォームドコンセントが今何故とりだたされるのかわからない”といった内容の文章を載せられていたのを記憶しております。

手術についても実際に自分で執刀しなければ理解できない所がありメスを持たせるのが一番だと考えられ、若い医局員がより多くの手術を経験出来るような環境を整えてくださいました。私自身も臨床経験の浅い後輩の助手を務めるようになって大島先生が如何にハラハラしながら私達の手術を見つめていたのかがわかるようになりました。自分が執刀すれば、もっと早く、綺麗な手術が出来きるのにと思いながらもじっと我慢されていたことと思います。しかしながら、そのようにして育て上げた後輩達も手術が上手になり積極的な姿をみせるようになり巣立っていきました。免許皆伝の書状はもらえませんでしたが、手術中にエアドリルの先端にかかるはずの水がはずれて、ふとみると助手をされていた大島先生がこっくりされているようになると卒業しても良いあかしだったのではないかと思います。このように他の大学にはないユニークな脊椎外科医づくりのおかげで、山形県内にはたくさんの脊椎外科医が育ちました。

先生は、アメリカにはあまり興味がなく経済的にはまだ恵まれないアジアに目を向けておられました。私が初めて参加した国際学会は、インドネシアのジャカルタで開催されたWPOAでした。大島先生、林先生、平本先生、武井先生と私の５人で参加しましたが、一

生忘れられない旅になりました。旅の詳細は15年ほど前の教室誌に載っておりますが、大島先生の探求心には驚かされました。観光のため立ち寄ったジャワ島では、たった１人でキンタマニ山の麓まで出かけで行き、おみやげに革ジャンを買ってこられました。その探検がどのぐらい魅力的だったかはわかりませんが、大島先生の満足げな表情から察するとアメリカにはない何かがあったのだと思います。後になって何度かどの様な所だったか質問しましたが、曖昧な返事しかもらえなかったのが心残りです。キンタマニ山は、初めて訪れた私達には未知の世界であり、ジャワ島で最も標高が高い密林のような山だったと記憶しています。大島先生とバングラディシュから日本へ留学にきたラーマン医師との出会いは、大島先生にとってもラーマン医師にとっても人生を左右する大きな出来事だったと思います。今、ラーマン医師はバングラディシュの人達にとってなくてはならない存在となりました。これまで、大島先生がどうしてバングラディシュにこだわるのか良く理解できませんでした。しかしながら、昨年、初めてバングラディシュを訪問してみてなんとなくわかるようになりました。ジャワ島でも感じましたが、日常の中になんとなく安心できる風景が残っていたのです。さらに自分の記憶をたどってみると、それは幼い頃に日本でもまだ残っていた風景だったのです。自然への畏敬があり、わくわくするような風景や音楽があり、自然と向き合った生活がありました。ゆったりと流れていく時間の中で、なにかあたたかいものが包んでくれるような感覚でした。このような感覚は、中国のハルビンを訪問したときも感じましたが、アメリカを旅した時は感じませんでした。もしかしたら、大島先生は私達が大人になって忘れてしまった子どもの頃のわくわくするような気持ちをずっと忘れずにお持ちになっていたのかもしれません。

大島先生が臨床の第一線を退かれ、次に取り組まれたのが教育です。特に日本の将来を危惧され、子供達の教育に注目されておりました。“わくわくするような機会がない今の子供達はかわいそうだ”と自費で山を買って子供達がわくわくするような場所をつくってあげたいと夢を語っておられました。子供達を救うために親を教育しなければいけないと考え、お母さんのためのセミナーも企画、実行されました。今回、そのセミナーもようやく軌道に乗ってきた矢先に発病されたのが残念です。しかし、先生はたくさんの種を残されました。やがて、その種が芽吹き10年、20年後には花咲くことと思います。心よりご冥福をお祈りいたします。

Last son

山形大学医学部整形外科　**武　井　　寛**

現在現役で活躍されている多くの脊椎・脊髄外科医同様、私がSpine surgeonを志したのも大島先生という大きな存在があったからです。学生時代、医学部の授業にあまり熱心ではなかった私の耳にも、「整形外科の大島助教授は凄いヒトらしい」あるいは「外科系で自分の名前がついた術式を持ってるのは大島先生だけらしい」などの噂が聞こえてきました。私はスポーツ障害や労働災害に興味を持って整形外科に入局しましたが、その存在感と影響力に感化されるのは当然のことでした。入局４年目から５年目にかけて一年半勤務

させていただいた寒河江市立病院には大島先生が手伝いに来られていて、脊椎外科の基本をそれこそ手取足取り教えていただきました。患者への接し方、診察の仕方、説明の仕方、いろいろな検査、基本的な手術手技から術後のマネージメントまで、自分の診療スタイルはこの時代に固まったと思っています。下手な手術でも嫌な顔をせず（お静かなのでフト見上げると瞑想中？　ということも時にありましたが）リードしていただいたことを自分が教える立場になって改めて深く感謝しております。今はやりのinformed concentなど、そんな言葉が導入される遙か前から先生は実践されておいででした。「これだけ大島先生から多くを教わったのは自分が最後なのではないか？」、私は密かに大島先生の「Last son」を自認していました。

先生に教わったことは診療面だけにとどまりません。脊椎外科を、整形外科を、山形県の医療をよりよく発展させるための自由奔放な発想、それを現実に生かす行動力、より効率化するためのシステム作り、などなど、現在大学に在籍するものとして見習わなければならないことばかりです。新しいモノへの飽くなき好奇心も真似の出来ないことの一つでした。臨床家として、大学人として、モノ作りの名人として悠々と進んでおられる先生は、まさに私たち後進の憧れであり、目標でした。

インドネシアでの学会に同行させていただいたこと、大島医院での脊椎班新年会、新築なったさくらパレスでのリサーチミーティングなどなど思い出は語り尽くせません。保健医療大学に移られてからはリハビリテーション、特にスポーツ障害の予防と対策にお仕事のウェートを移されましたが、NPOライフサポート協会の設立時には声をかけていただき、さらに私自身の世界を、仕事の幅を広げていただきました。今年は山形県チームドクターとしての国体帯同に引き続き、先生の後を継いで山形県スポーツ振興審議会の委員にもさせていただきました。脊椎脊髄外科のみならず、スポーツ医学ひいてはスポーツそのものの振興にもますます身を投じて行かなければならないと気を引き締め直しているところです。

先生には多くを教えていただきたくさんの影響を受けて来ましたが、私たちが最も引き継いで行かなければならないのは、やはり自由な発想、行動力、システム作りといった本来学究の徒が持っているべき姿勢です。何もかもがますます忙しくなってきている現在の世の中で、落ち着いて何かを考えたり、すぐに行動したりということは年々出来づらくなってきています。しかしそんな言い訳をして逃げるのではなく、少しでも先生に近づけるよう努力するのが「Last son」の使命だと考えています。弟子達の成長を、是非お見守りください。

弟子を育てる大島先生

新潟大学整形外科名誉教授
新潟医療福祉大学学長　**髙　橋　栄　明**

昨日、お別れ会に遠藤　直人教授とともに、出席させていただきましたが、JR福島駅での事故のため、搭乗予定列車が運休となり、会場到着が遅れ、４Ｆにて参加させていただきました。それで直接、お悔やみの言葉もお話しする機会がなかったので、この手紙を書い

ております。

義彦先生がご病気であったとはまったく知らず、整形外科の同窓会からのFaxにて知らせていただき、余りの突然のこととて、驚くばかりでした。奥様にはこの１年短くて長い１年であったとお察し申し上げます。心からお悔やみ申し上げます。

義彦先生と私との出会いは昭和42年で、先生が斉藤英彦先生、祖父江牟婁人先生など多士済々の同級生とともに整形外科学教室に入局されたときでした。学園紛争は真っ盛りの時で、私のとても及ばない、社会的に目覚めた凄い新人が入局したとの印象でした。私は夏休み前には下都賀病院に出張していましたので、お会いしたのは確か秋になってからであったと思います。当時の整形外科同窓会誌を見ますと、新人の自己紹介の寄稿文としてはきわめて異色なる「或る男」という文章を投稿しておられました。弥彦競輪にヒントを得たと思われる競輪選手の話で、内容は社会の矛盾と戦う、家族から理解されない男の話でした。私より、はるかに大人な新人だと驚きました。常にオールラウンドの整形外科医を目指していた義彦先生は46年に半年間神経内科での研修をされ、整形外科に戻られた昭和47年には皆川泓義先生とともに新潟大学で初めて脊椎研究班を設立されました。整形外科教室の開講60周年記念業績集に、「誰が手術をしようと、要は患者のために、うまくなおればよい訳で、……」と義彦先生は書かれておられ、常に患者中心の軸を持っておられました。また、「（脊椎・脊髄）を扱うものは神経系の病理、と同様に骨・関節・靭帯のそれにも精通していなければならない……」と自戒の言葉も同時に書かれておられました。奥様もお別れの言葉で言っておられましたが、お弟子さんを育成する姿勢は既にこのころから一貫してもたれておられました。実験にも安川敬一郎君の誘発脊髄波の手術の手伝い、犬の獲得にも尽力され、県内各地、海浜公園を探され、更にはお宅の庭まで使われたとか。本当に面倒見がよい方でした。昭和54年には山形に移られ、渡辺好博教室を補佐されて、整形外科、脊椎外科の分野で大島式脊柱管拡大術、インストルメントなど大きな素晴らしい業績を挙げられました。

私が山形にお伺いしたときにバングラデシュとの交流について少しお話をお聞きしたことがあります。今回、お別れ会でその素晴らしい実績を知ることができました。これは余人でできないことで、大島先生の弟子を育てるという一貫した態度、目標を定めたらどのようにして実現するかをさぐり着実に実践する姿勢、温かい人柄による多数の仲間によるものと思います。山形ダッカ友好病院の院長先生の心のこもった弔辞に深い感銘を受けました。

新設の県立大学にまだ学生のいない時期に新築した校舎を案内していただきました。私も既にコメデイカル育成の大学に勤務が決まっていましたので、お互いに夢を語り合いました。学生に「自ら考える力をいかにつけるか」この動機付けがもっとも大切であることを、二人の考えは一致しました。そしてこのときに約束して実現していないことは、国立、公立、私立を超えて、理学療法学科、作業療法学科の学生の集まりを作りましょうということでした。学生の発表のテープも送っていただきました。ただそのときは、私たちの大学が開学して間もないときで、１年生しかおらず、交流する時期に達していなかったため

に、時間がたってしまいました。本学も１期生が３学年となったので、その学生の交流と学生大会の設立を義彦先生と一緒にと考えていた矢先でした。本当に残念です。

蔵王のスキー旅行ではいつも親切に対応していただきました。スポーツ医科学の研究、NPOライフサポート協会として「子どものスポーツ医学入門」はまさに時機を得た出版と考えます。

義彦先生のご活動は非常に広く、常に患者を中心に考えられ、後進の教育、指導、育成には時間をいとわず、地域貢献、国際交流など真に素晴らしいと感銘を深くしております。

この若さで幽明界を異にされたのは義彦先生にはどんなにか心残りであったでしょう。そして奥様には本当に、本当に残念であられたこととお察しいたします。しかし、これから、どうぞお体を大切に。悠愛会のお仕事のご発展、ご一家のご活躍を心から祈念いたします。

大島義彦先生に送る言葉

新潟県立中央病院　**東　條　　猛**

１．出会い
２．兄貴として
３．大腿四頭筋拘縮症との戦い
４．脊椎外科への情熱…脊髄損傷患者
５．田島達也教授と大島先生の逸話
６．医局長の教え…胃か肝臓か
７．免疫不全児への感心…小児慢性肉芽腫症
８．阿部先生の紹介…最後の囲碁手談

１．「出会い」

昭和44年卒の小生は、学生時代は弓道部や俳句部に所属していましたが、弓道部に入部したきっかけは“小川扶美さん”でした。入学してまもないころ学友会の運動関係の倶楽部に入ろうかまたは自動車部に行こうか迷っていました。そして自動車部の活動ぶりを見ながら、すぐ隣の弓道部が目に入りました。なんとなく見ているうちに一人の美しい女性部員が凛々しく矢を放ちました。その瞬間、髪の毛がサッと頬になびき、とても美しかったのです。これに見惚れてしまい、気がついたら入部していました。その女性こそ扶美さんでした。以来、東日本医科学生総合体育大会ではライバルであった慶応大学と新潟大学が競い合って優勝していました。たしかその年は、東大が主催校でした。三四郎池の傍の弓道場で開催されていて、昼休みに扶美さんと一緒に近くでカレーライスを食べた思い出があります。この時、鈴木部長（耳鼻科）は「優勝したら髭を剃る」といって皆の皆で髭を剃りましたね。小生は時計メガネ屋で生まれました。商人の家庭で育ったせいか、親からの遺伝か分かりませんが、よく喋るほうです。ある時、下宿の先輩（尾崎信紘先生）から「お前は少し喋り過ぎる！　少し言葉を大事にしろ！　鍛えてやるから俳句部に来い」

と叱られ、入部しました。当時の俳句部には中田瑞穂先生率いるそうそうたるメンバーがおりました。法医学の山之内教授・解剖学の小片保教授・小池上教授・整形外科の蒲原宏先生はじめ“かき正”亭主の春霞さんや古町で呉服屋“赤羽”の亭主・岳翁さんなどなど芸に秀でた人達で構成されていました。真面目にやっているうちに部長までやらされてしまい、最初に誉められた句が「秋蝶の矢道に舞いし追悼射」でした。これは弓道部に所属しておられた小林部員が白血病で倒れ、そのご両親の前で追悼射会が行われた時の気持ちを詠ったものでした。長々と思い出話を書いてしまいましたが、学生時代の印象に残るエピソードを拾い出したものです。

このような充実した日々を送りながら学Ⅰ、学Ⅱへと進学し、学Ⅳ（昭和43年）になったころインターン廃止に向けて全国で嵐が吹き荒れました。43・44卒がその矢面に立ちクラスの中では全学連、カクマルといった急進派と、なかに入って改革しようとする青医連の二派に分かれ、我がクラスは青医連派である大島義彦先生の考えを支持し、血判状を作って固く誓い合いました。しかし５名ほど脱退し急進派の元へ走りました。扶美さんのクラスにも本間・高塚（こうづか）といった急進派の輩がいました。この時から41卒の色んな方達（大島・斉藤・祖父江・高橋・木村先生など）と知り合うこととなりました。42卒の方達とはあまり話をしませんでした。我がクラスでは小生と仲のよかった徳永昭輝（産婦人科）とが一緒になって青医連の考えをクラスに浸透させました。水道町の我が家の隣で血判状を作ったのです。43卒の清水武昭先生には大変お世話になり、兄弟のように色々教えていただきました。我々44卒では各教室に出向き、“非入局・自主研修”を訴えてきました。ある科では真剣に取り組んでもらうことも出来ましたが、全然相手にしてもらえなかった科も多くあり、その仲で整形外科では一応話しをさせてもらえましたが、河野左宙教授はどちらかというと“争い”を嫌う先生でしたので「そんなことしないで、入局したら？」とおっしゃいましたが、田島助教授はアメリカ仕込みの方でしたので“自主性”には一定の理解をしてもらえました。しかし事態は次第に切迫していき、教授会を吊るし上げに追いこんでからは、整形外科教室に出向いても祖父江とかいうオッカナイ先輩が門番として教授室前に立って会わせてもらえませんでした。このとき大島先生や斉藤先生は我々と共に闘って下さいました。これが大島先生との出会いです。

２．兄貴として

整形外科にお世話になるきっかけは、大島先生や斉藤先生であったことは先に述べましたが、もう一つこの科を選んだきっかけは“非入局自主研修”のおかげです。小生は44卒の一人一人の研修プログラムを三次元的にグラフ化し、作成し終わった時にはすでに３月も終わり頃でした。神経学が好きで、外科系であれば良いと思っていたので脳外科が一番に浮かびます。しかし、同級生で脳外科に行く者は少数であまり交友がなかった連中でした。そこで非入局闘争で力になって下さった先生方（大島先生・斉藤先生）のいる整形外科に決めたのです。しかし、大学側は我々44卒を外に放り出したのです。結局２／３は大学外研修を余儀なくされたので小生はがんセンターに問い合わせたところ「二年間」が義務であると聞き諦めて、臨港病院に行きました。そこでは地主院長が面接に応じ「この病院は研修病院ではない。諦めて下さい。」と言われてしまいました。さらに「給料はいくら

欲しいのか？」と聞かれ「５万円以上頂ければ幸いです。」と答えたところ「とんでもない！５万円といえば大学の助教授の給料だぞ！」とけんもほろろに断られてしまいました。ふて腐れて自宅に戻った翌日、炬燵に入っていた時、電話が鳴って出たところ「臨港病院の地主です。急きょ君を研修医として採用することになったので来なさい。」と言われました。「…なんで？」と思いましたが、ひとまず身支度を整え病院に向いました。給料は税込みで月５万円・昼食は病院で医局員と同じ扱いとするということでした。院長室から出て早速、整形外科外来に行きましたところ田中浩二部長と村井ゆずる先生がおられ丁重なご説明を受けました。この時知ったのですが河野教授が地主院長をホテル新潟にお呼びして一席もうけ、「東條とかいう学生が行ったと思いますが、将来整形外科医になりたいという者なので何とか雇って下さい。」と頭を下げてお願いしてくださった。と聞いて感激しました。しかも毎土曜日には大学のレ線検討会に出てくるようにお誘い下さったので、大手を振って臨港病院から大学研修に出向出来るシステムが出来ました。以来、河野先生には足を向けて寝られなくなりました。こうしてようやく河野教授率いる整形外科の一員として皆に溶けこむことが出来ました。大島先生・斉藤先生から医局の仕組みやら“しきたり”まで多くのものを手とり足とり教えていただきました。まさに兄貴として大きな存在でした。

３．大腿四頭筋拘縮症との戦い

昭和49年に栃木県鰍沢の農村で“子ども達が走ると転ぶ”という奇病？　があるということを東大の高橋公正先生が詳しく調査して、これは筋肉内注射が原因でおこる大腿四頭筋拘縮症であることを発表し、東大医学部整形外科の今井先生達が全国の医学部若手医師達に調査するよう働きかけたのでした。大島先生はこの今井先生に共感し、斉藤英彦先生と一緒になって小生にも本疾患を新潟でも徹底調査してみよう！　と熱っぽく語っていただき、この疾患を先天性疾患であるという厚生省寄りの意見を主張していた金澤大学医学部整形外科高瀬武平教授の見解は間違っているという事を証明しようと張り切って取り組みました。そして新潟県庁におもむき、ついに調査費用を捻出して頂くことになったのです。

内容は「昭和47年生まれの子ども達が中学３年になるまでの15年間、毎年夏休みや春休みを利用して県内の保健所に患者を集めて新潟大学医学部整形外科医師による自主調査を行う」というものでした。一方、“大腿四頭筋拘縮症の親の会”の弁護団（約７名）に対して連日、新潟裁判所まえのトキワホテルで勉強会をやりました。調査対象を狭めないようにして全県下の小学校・中学校の生徒たちを対象として“びっこで歩く”“肩が上がらない”“正座ができない”“しゃがめない”子ども達を保健所に集めていただき、県庁の福祉課職員数名と複数の医師が村上・新発田・佐渡・長岡・柏崎・上越保健所の６か所に出向き、まる一日がかりで詳しく調査票を作っていきました。これを大学に戻って全員で夜遅くまでかかってパンチカードに転写するのです。

その結果、重症な大腿四頭筋拘縮症患者は佐渡と新発田に集中していることが分かりました。また上越と新潟に三角筋拘縮症がいましたが、殿筋拘縮症は思ったより少なく新潟地区のもので手術を要したものは２例しかおりませんでした。

数年して東大の佐野先生のご発表に次いで新潟からも各学会や研究会で発表することが出来、全国的に知られるようになり、富山労災病院の飯田先生ともこれを通じて大分仲良しになりました。また裁判所にも何回も証人喚問と証して原告側・弁護側の両方から鋭い質問を浴びせられましたが、真っ向から反対の考えを述べる弁護士たちも昼食休憩のときには実に和やかな？　雰囲気でまるで友人同士といった話ぶりでした。午後の開廷となれば丁々発矢と激論を交わすのですから“役者”ですね！　弁護士とは！

この裁判では結局、国と製薬会社と医師の三者の連帯責任を訴えつづけ、“和解”というかたちで決着がついたのでした。我々が勝ったのです！　無論、小児科学会でも大きく取り上げられ、昭和56年以来この大腿四頭筋拘縮症患者は発生していません。小生が中央病院に赴任して２年くらいして昭和63年春頃、弁護団長の片桐さんから分厚い冊子が三冊届きました。大島先生と大きな仕事を成し遂げた思いです。

４．脊椎外科への情熱…脊髄損傷患者

昭和48年か49年頃だったと思いますが、ある日35歳くらいの若いご婦人がトランポリンの模範演技指導の最中にまっ逆さまに落下してトランポリンのシートを固定していた鉄製の枠とシートの隙間に首を突っ込んだ事故で、頚髄損傷を負った若い体育系の先生が大学に運び込まれてきました。意識はしっかりしていましたが、第５頚髄神経以下の完全麻痺でした。脊髄造影を行ったのち、超早期後方徐圧術を行うべく田島先生の許可を得て手術を行うことになりました。当時の手術適応は機能回復をはかるというより、脊柱支持を得るための手術が多かったように思います。しかし、その頃の最新の文献を脊椎班のミーティングで大島先生が「猫を用いた実験的脊髄損傷に対する超早期の徐圧ならびに冷却法の効果」という内容の論文をメンバーに披露された直後の出来事でした。この方法で駄目元かもしれないがやってみようということになって手術が開始されました。当時の中央手術場で一番広かった第２手術室で行われたのですが、後方徐圧ののち頚髄硬膜を露出してから超大量の冷却生食水で数時間冷やしつづけました。気が付くとあの広い手術場が足の踏み場もないくらい生食ボトルで埋め尽くされていました。ようやく長い手術が終わって病室にかえって来た翌日、患者さんは「左目が見えない」と訴えました。眼科医に診察依頼したところ「長時間の腹臥位で左目を圧迫しつづけたため失明したもの」といわれました。また、肝心の頚髄麻痺は全く改善徴候なく、失明だけが残った結果となりました。

やがて患者さんは肺炎を併発し、尊い命を亡くされてしまいました。この症例をとおして沢山の事を教えられました。手術しなければ間違いなく麻痺は改善することがないどころか麻痺はさらに上行し、呼吸麻痺に至ることは必至でした。

家族は精一杯やっていただいたことに感謝されていましたが、私は残念な気持ちでいっぱいでした。論文を過信しすぎたのが悪かったのか、人での実証なきままこの方法を実践したことで随分悩みました。以来、論文をあまり信用出来なくなりましたが、大島先生は患者さんのために最善の方法をおこなうのが臨床医の本命であるということを貫いた先生でした。その後も数々の新しい手術法を考案されましたが、それは現在までこの姿勢を持ちつづけたからであろうと思います。多くの患者さんを診療し、沢山の論文を読み、もっと良い方法がきっとあるという信念を持ち続けた先生であったと思います。このような姿

勢が臨床医のあるべき姿と思っています。

５．田島達也教授と大島先生の逸話

あれは確か昭和48年頃だったと思います。大島義彦先生が医局長だった頃です。雪が降ったある寒い日の朝、病室に行って見ると田島先生が痛そうに腰を曲げて歩いておられました。なんでも朝出かけるときに車庫の雪のけの最中に“ぎっくり腰”を起こされたのです。これから千葉大学へ講演に出かけるのですぐに痛みをとって欲しいと大島先生に相談されておりました。運悪いことに、そこへ小生が通りがかったので、大島先生が「東條君！　田島先生に硬膜外ブロックをしてあげて下さい。」と病室にある当直室に連れていかれました。田島先生はすでに腰を丸くして横になっておられました。田島先生は小生を見て不安そうでしたが大島先生は「大丈夫です。東條君は麻酔科を終わったばかりですから私より上手ですよ！」なだめて下さった。少し勇気が出てきたところで慎重に腰をアルコール綿で三回消毒してから局麻をして、硬膜外針をおそるおそる挿入していった。そのときでしたプツン！　と音がしていきなりリコールが出てくるではないですか！　頭が真っ白になってしまいました。「あっ！…」と声を出したかどうか分からなかったのですが、とにかく傍には大島先生が看護婦に目で合図をしてデカドロンと局麻剤の入った注射器を取り替るように指示し、すばやくデカドロンだけにした注射器を用意してもらって差し替えました。この時の看護婦（確か堺さんだったと思います）の機転がきいた判断に救われた思いでした！　田島先生は「まだですか！　早くしてください！」と急かされた。「はい！」と言うのが精一杯であった私はゆっくりとデカドロンを硬膜外？　に注入した。田島先生は「何ともないですね。少しも暖かくなりませんよ！　これでいいのですか？」と聞かれ、大島先生は「少し横になっていてください。そのうち痛みが軽くなってきますから。」と言ってくださいました。５分ほど静寂が続き、田島先生は「少し良くなったようです。じゃあ汽車時間もあるから起きていいですか？」とおもむろに起きあがったのですが、痛そうでした。手を腰に当てながら廊下を歩いて教授室に戻っていかれました。数日して田島先生にお聞きしたら「うん、あの注射はあまり効かなかったね。でも無事に千葉大学で講演をしてきたよ。」とおっしゃって下さいました。「ああそうですか。」とホッと胸をなでおろしたのです。

しかし、この事件後、臨床講義や外来・病棟回診でも硬膜外ブロックをあまり信用されなくなったのはいうまでもありません。それにしても田島先生が生きておられるうちに本当の事を告白すべきだったと後悔しています。

追記：大島先生と小生はその後も硬膜外ブロックは有効と信じてやりまくったことは言うまでもありません。

６．医局長の教え…胃か肝臓か

小生が整形外科医局長に選ばれたのは昭和56年11月でした。最初の一年間は前医局長の祖父江先生に手とり足とり導かれて何がなんだかわからない内に終わってしまいました。２年目になってようやく“自分らしさ”が出せるようになった気がします。大学内・外若手医師や勤務医、開業医の先生方の諸問題を受けとめ、教室のスタッフと調整を図りなが

ら一つの方向性を見出し、田島教授に報告して擂り合わせをして大学医局の方針を打ち出すという生活が板に付いてきました。また、医局会計の仕事や他大学との学会関係の連絡仕事さらには文部省・厚生省からの通達や終始徹底、県や市との折衝、医師会関連の仕事など対外的仕事のほかに製薬会社やMRとの面会そして自分自身の研究活動や外来・入院患者への診療業務と追いまくられ３年目ともなると疲れて来ますので後半は惰性で日々を過ごすようになってしまいました。祖父江先生は酒の飲み過ぎで胃に穴があき肝臓を壊しました。大島先生は心身疲労による胃潰瘍をわずらいました。ある時、誰かから「医局長になると胃か肝臓がやられるもんだ」と聞いたことがあります。さて小生の肝臓は丈夫のうえ、胃のほうもどうやら潰瘍にもならずに済みました。これは、医局長としてまともな仕事をしていなかったせいではないか？　と思うようになりました。歴代の名医局長には近づけなかったと反省しています。

７．免疫不全児への感心…小児慢性肉芽腫症

生後10日ころから原因不明の発熱がつづき、頚部リンパ節炎、白血球増多、CRP強陽性やがて右前腕腫脹（橈骨骨髄炎）となって整形外科を訪れました。早速、前腕の腫脹部に切開・排膿を施し２週間あまりで全快。しかし間もなく左腓骨下端に腫脹が出現し、レ線写真にて骨透瞭像を認めたため、骨髄炎と診断。切開・排膿にて治癒しました。起炎菌はいずれもセラチア菌でした。この時も頚部リンパ節炎が併発していましたので、切開したところ膿汁流失・やはりセラチア菌が検出されました。この頃よりなんらかの免疫不全が絡んでいるのであろうと疑いを持つようになりました。そんなころ大島先生が「最近読んだ医事新報にこの症例と似たような報告があったよ。」と見せて下さいました。見ると“小児慢性肉芽腫症”という疾患名で詳しく記載されていました。繰り返すリンパ節炎・肝腫大・白血球増多・まれに多発骨髄炎・さらに白血球の貪食能は正常であるが、白血球細胞内での細菌殺傷能力低下という小児の免疫不全症候群でした。NBTテスト陽性であれば一応疑ってみるべきであるということも報告されていました。遺伝形式をとるものと、そうでないsporadicなものとがあるということでした。早速、細菌学教室にいって黄色ブドウ状球菌209P標準株（一度も抗生物質にさらされていない細菌）を貰ってきて、Ⅱ内の庭山先生を訪ねて白血球分離法を習い、手とり足とり教えていただきながら白血球貪食能と殺菌能の実験に取り組みました。まず、患者とその母親、父親さらに兄弟（姉）さらに祖母から新鮮血をいただいて、白血球を分離し、試験管に10,000個／mlに調整、別な試験管には確か黄色ブ菌を生理的食塩水内に10,000個／mlとして両者を混合して幾つかの試験管に分けて37℃ の攪拌器内で１時間後、２時間後、24時間後にそれぞれ取り出して、遠心分離してから、その上澄みと沈殿塊に分けます。上澄みはそのまま寒天培養し、沈殿塊には蒸留水を勢いよく吹きかけて白血球細胞膜を破壊します。この破壊したものを寒天培養します。これもまた24時間後、48時間後に各培地にどのくらい菌繁殖しているか計測しました。小生にとって日夜何回も実験室に出入りしやっと結果を得る事が出来ました。その結果、母親は患者と正常者の中間値を示し、父親・兄弟（姉）・祖母は正常でした。これを色々な学会で発表したところ大変な反響を呼びました。なにしろ日本で９例目なのですが、他の８例はすべて培検例でしたが小生の発表例は生前に確定診断できたことが大いに

評価されたのでした。その後、小生のペーパーが小児科関連の雑誌や発表に引用されることになりました。それもこれもみな大島先生のおかげと感謝しています。

８．阿部先生の紹介…最後の囲碁手談

さて小生は昭和61年４月から県立中央病院に赴任したのですが、この経緯についてお話したいと思います。大学で医局長を務め終えたのが昭和59年11月でした。この三年間医局長として教室の台所をあずかって一応大過なく過ごせたのも田島教授はじめ高橋英明教授・松原統講師・伊藤惣一郎講師・祖父江助手・大島義彦助手・斉藤英彦助手・吉津孝衛助手などの励ましや協力によって支えられたものと思っております。

医局長をバトンタッチした昭和59年末ころから「さて、これからなにをしようかな？」と思案していたところ、突然、元医療短大主事である斉藤秀晃先生（新潟県立中央病院院長）が医局にやって来られ「うちの病院に来ないか？」と勧誘されました。斉藤先生とは学生時代からよく存じ上げていましたし、医療短大の非常勤講師としてしょっちゅう講義に出向いていましたので、小生の郷里である新井市の隣町でしたので県内のどこかに就職するなら中央病院もその選択肢の一つでありました。大学では田島教授の整形外科を身につけていましたが、“自分流の整形外科”もやってみたい気持ちもありました。誰かに相談したいと思って大島先生にお話したところ「いいんじゃないかな？　あそこ（中央病院には阿部惇という同級生がいるよ。彼はいいやつだ。県内ただ一つの京都大学関連病院で頑張っていて、自分のやりたい事をきちんとやっている偉いやつだ。彼がいるなら大丈夫だよ。」と言って下さいました。それに斉藤秀晃先生は自分をかって下さって、京都大学･関西医大の先生方を追い出して、新潟大学から是が非でも良い先生を引っ張ってきたいという強い信念を熱く語って下さいました。以来、何度も教室に足を運んでくださって小生にお話して下さいました。この熱意に勇気づけられて、遂に決心した次第です。そして大島先生や教室の先輩諸氏からも快諾していただいたので、田島教授にお話し申し上げました。そしたら「えっ！　大学を辞めるのですか？　来年は日本整形外科学会総会を新潟大学で開催することが決まっているのに困りますよ！」といって最初は反対されました。しかし、小生にとってこのチャンスを逃せば、いざ大学を去るときは、ボロボロになって新たな目標を作れるのか不安でしたので熱く嘆願してようやく許してもらいました。田島教授とは良い関係でしたので大学を離れても教室のために外から応援できることや、京都から奪い取るにはRA関連のある程度名前が知られたものの方が良いということもあってどうにか分かってもらえたのでした。当時、小川亮恵教授とは学会でよくお話をさせていただいた方でしたので、最後の引継ぎの時も中央病院の院長室では快く小生にバトンタッチして下さいました。こうして赴任したわけですが、大島先生の言うとおり、この病院に来てよかったと思っています。赴任して間もなく阿部先生と囲碁をする機会に恵まれました。小生より少し強いのですが、時には勝たせてもらっていました。そんなとき今のお話をしていたら、「一度、大島先生を高田にお呼びしましょう！」と言うことになってチャンスを伺っていましたところ、小生が幹事をしていました新潟関節外科研究会を長野県の野沢温泉“桐屋”で開催する機会に山形より大島助教授を特別講演の講師として来ていただくことにしました。大島先生は勿論、喜んで承知して下さいました。研究会は成功裏に終

わって翌日、高田まで同行していただき阿部先生宅で楽しく歓談し囲碁の二面打ちで興じました。確か阿部先生と小生が二人そろって負かされてしまいました。囲碁の最中大島先生は上機嫌で阿部先生の奥様(恭子さん)とも楽しそうに学生時代の頃の話をペチャペチャ喋っていました。普通は接待した方に花を持たせる？　ことが良いと分かっておられるのに全然お構いなしでした。我々は勿論ですが大島先生にもきっと良い思い出になったことでしょう。

長々と大島先生のことを書いてしまいましたことをお許し下さい。

大島先生が我々後輩に教えてくださった教訓・医療の在り方・情熱・遠い未来を見つめる確かな目といったものを若い先生方に伝えていくことを御約束致します。

“巨星落つ”という思いです。しかし、大島先生のスピリッツは永遠です。

扶美様もお力落としのことと思いますが、親子、兄弟、親戚の方々、ご友人・スタッフの方々と力強く生き抜いて下さい。

故大島義彦先生のご冥福をお祈り致します。　　合掌…　東　條　　猛

大島義彦先生を偲んで

NPO法人ライフサポート協会理事　**若　村　利　雄**

先生が他界されてから早くも２年が経ってしまいましたが東京に居る私にとっては未だにその実感がありません。先生が残された地域に密着したスポーツ医科学センター設立と言う大きな仕事をNPOライフサポート協会が引き継ぎ、全国に先駆けたこの偉大な事業も今秋には晴れて具体化に向けて動き出す運びとなりました。幾度とない困難を切り抜ける度に大島先生から力強く背中を押されていた気がしてならず、いやきっとそうでなければ乗り切れなかった事を考える度に、大島義彦先生は私にとって未だに生き続けております。

巨大な建物を造るでもない、見た目には些細な変化にしか映らない「地域に密着した（住民が遍く享受できる仕組み）スポーツ医科学センター」とは何か。これは決して大袈裟な話ではありません。

わが国に初めてスポーツ文化を根付かせる為の礎になるもの。10年ほど前、当時文部省（現文部科学省）が国民の体力向上と健康増進を図る目的で全国に欧州型地域スポーツクラブの普及策を打ち出し、今や約2000ヶ所近くのクラブが創設されましたが、目標に到達出来ているクラブは殆ど無いと言っても過言ではないほど難しい事業である訳です。

義彦先生は予てより欧米型のようなスポーツ文化は馴染まないのではないか？、と言う懸念もあり、ご承知のとおり超多忙な先生は日々の仕事に忙殺されこれと言った活動には入れない状態が続いておりましたが、平成10年夏、日本にスポーツ文化を根付かせるには山形から、山形独自の、山形モデルのスポーツ振興を考えるべきで、その基本は心身ともに健全な身体づくりが何よりも優先されるべき課題でありそれには人々の理解が不可欠で「草の根活動（啓蒙）こそ原点」として同志を募り、NPOライフサポート協会を創設、本

格的な活動に入りました。あれから７年。少しずつ山は動きその基盤となるセンターが具体化されるところまできました。

子供たちを、そして将来ある若きアスリート達を守らなければならない。と言う義彦先生の優しさと情熱は必ず実を結び、我が国にも欧州に負けないスポーツ文化が根付くものと確信しております。今もなお我々の傍で見守っていて下さる義彦先生、安らかにお眠りください。

平成17年９月

「スポーツに打ち込む少年少女の健康を守る お母さんのためのトレーナー入門講座」の開催

（お母さんは名トレーナー）

NPO法人ライフサポート協会理事長　**大島義彦**

開催の主旨

山形県においても、近年、青少年のスポーツ活動はますます盛んになり、大いに歓迎されているところであります。最前線の指導者の方々も毎日の生活の中から、多大な時間を割かれ、ボランティアとして大活躍をしておられますが、細部にわたって十分というわけにはいきません。

そこで、今度、特定非営利活動（NPO）法人ライフサポート協会は、関係者各位の要請もあり、山形県スポーツ課、山形県体育協会の後援、企業の協賛のもとに、スポーツジュニアの健康支援活動を行うことに致しました。

その方法は、スポーツに打ち込む少年少女を直接対象とするのではなく、その保護者であるお母さんを対象としてみました（お父さんの参加も可）。お母さんは子供にとって、すべての面で、いつでも、最大の観察者でもあり理解者です。従って、お母さんはもともと最良の名トレーナーになる資格を備えています。そこで、お母さんに名トレーナーになっていただく為の入門講座（お母さんは名トレーナー）の開催を企画、実施することになった次第です。できれば、名トレーナーになったお母さんが、次々と名トレーナー・お母さんを生み出し、本県のスポーツに打ち込む少年少女の心身の健やかな育成がなされ、そして体力が最盛期を迎える頃、競技会の面でも大輪の花を咲かせることになっていけば、望外の喜びであります。

大島義彦先生からの最後の電話

NPO法人山形県トレーナー協会理事長　**皆　川　清　彦**

平成15年８月15日、この日の携帯電話での会話を私は忘れることができません。「大島です。実は、ぼくは危篤の状態なんです。それでNPO認定記念のトレーナー大会の件なんですが、白木先生と宜しく…。それから、今後のことについては…　協会のことお願いします。それから話しておきたいことが…」大島義彦先生のところどころ聞き取れない声が受話器から流れたのでした。お恥ずかしい話ですが、本人自らが危篤というので最初は冗談かと思いましたが、必死に話をされる大島先生の声を聞きながら、私の手は震え、「先生大丈夫ですか」と、聞き返すのがやっとでした。

その後、すぐに病院に駆けつけましたが、大島義彦先生は痛みが激しくなり、痛止めの注射を打って眠られたとのこと。筆談がやっとの先生が、この日は体調が良く、久々に会

話が出来たことから、自ら私にお別れの電話をして下さったことを、奥様からお聞きしました。

それから２週間後。『大島義彦先生をしのぶ会』が、平成15年９月14日に行なわれました。その日、大島先生の輝かしい経歴や業績が、様々な領域の方々から披露されました。私をはじめ山形県トレーナー協会の会員にとって、ほとんどが初めて聞く話ばかりでした。大島先生は、ご自分の過去の功績はほとんど語ることなく、いつも未来のこと、これから山形県トレーナー協会が何をやっていかなければならないのかという話ばかり熱く語っていました。過去の話は、ユニークなエピソードばかりで、財布を忘れて九州に出張した体験談などなど…。

NPO法人山形県トレーナー協会の生みの親である大島先生は、『トレーナーの存在がなければスポーツ医科学トレーニングはない』という理念を掲げられ、平成13年12月の準備委員会設立から正に筆談で対応と言う危篤の状態に至るまで、トレーナーの技術技能向上や社会的地位の確立、県内普及のための活動を、未来志向の強いリーダーシップで取り組まれました。また、大島先生は日頃から、会員のほとんどが、20・30歳代の若者であるにもかかわらず、友人のように優しく接してくれたのです。県内トレーナーを心から愛してくれた大島先生とのお別れに、会員一同はこれまで経験したことのない深い悲しみにつつまれました。

大島先生が亡くなった今、先生を知らないトレーナーが、口コミで次々に山形県トレーナー協会に入会しています。設立時33名でスタートした会員は、県外からの参加も含め現在100名を越しています。

あの日の携帯電話で話した大島先生との会話が、最後となってしまいました。大島先生が、あの時何を言おうとしていたのか、これから山形県トレーナー協会員全員で考え、行動で示さなければならないと思っております。もう、大島先生から、電話は来ないのだから。

第１回山形県トレーナー大会での故大島先生の挨拶

県内トレーナーとして実際に活動されている人は大勢いるが、スポーツの指導者や選手の間でもトレーナーの存在がどういったものなのか、まだまだ理解されていません。

世界的には、スポーツトレーニングを科学的に行う、いわゆるスポーツ医科学トレーニングを取り入れることで、オリンピックなどですばらしい成果が上がっています。しかし、地方レベルでは、まだまだ浸透していない状況です。スポーツ医科学トレーニングを本当にやるには、スポーツドクターや栄養士などの専門の技術者がいるだけではだめで、実際にスポーツトレーニングの現場で選手たちに対して実践・指導するトレーナーがいなければ科学的トレーニングというのは成り立ちません。また、そういったトレーナーは、スポーツ競技者だけではなく、これからの時代、県民の健康づくりにおいても必要です。

そのために、山形県トレーナー協会では、県内のトレーナーに対してスポーツ医科学トレーニングの研修会などを開催し、技術の向上を図ると共に、県民の健康づくりや競技力向上に実際に生かしていきたいと思っています。そして１日も早く当協会から県内どこへでもトレーナーを派遣できる体制を整えたいと思います。

いい人生だったよな

長野県下伊那郡豊丘村河野
同年生　奥　山　義　臣

義彦君、少し早すぎたな、
教えてもらいたいことがいっぱいあって
あと一言聞きたかった人が、
痛いところをこらえていて、
もう一回励ましてほしかった人が、
あちこちにいたはずなのに、
そして第一に
苦労を共にして、
高い志と夢を持って
一緒に頑張ってきた
奥さんがいたのに、
どうしようもなかったのかなあ、
力一杯やったのにね。
義彦君はいつも
ひょうひょうとして、
激することがなかったのかな。
がまん強くて、優しくて、
しかししっかりしていたのかな。
早くから自立して、
はるか遠い地にあって、
こつこつと、しかし確実に
大きく、すばらしい人に
育っていたんだね。
伊那谷にも教え子が
活躍しているといっていた
立派な仕事をしていたんだな、
義彦君が、突然
同年会に来てくれて、
なつかしかったな、
うれしかったな、そして楽しかった、
皆が夢中で
花火等見ることもなく、
四十年前のことを
話していたな。
ちっともえらそうになく、（本当は立派な人なのに）

努力や苦労の話しもなく、
本当に楽しかったな、
だから、本当に悲しいよ、
さみしすぎるよ、どうしようもなく。

今田舎では町村合併のことで大変です。
私も小さな村で仕事を与えられて、振りまわされています。
本当は六月に同年の人達と、山形までお訪ねしたかったのですが、どうしても時間がとれなくて残念でした。
義彦君が、どんな想いでおられたのか、話しておきたかったと思います。
多分義彦君は立派な人だったと思います。
完成された人格を持っておられたのだと思います。
そして一昨年、突然会に出席されて、楽しく多くの友と語られていた姿が今でも目にうかびます。
そのことが、どうしてだったのかと先日も友と話しました。
元気なうちに友達に別れを言いに来てくれたんだろうかとさえ思います。
今、秋には大島君のことを語りあう会を開こうかと話しています。
赤石山脈に北沢峠という日本一高い峠があります。秋の日に我々老年が登れる高い所から、山形の方へ向って語りかけようかと思います。
奥様も深い悲しみから立ち直るには並大抵のことではないと思いますが、義彦君の気持ちは奥様が明るく元気に多くの患者さんの為に活躍されることを望んでおられると思います。
奥様から見ても、尊敬する人柄であったろうと想像します。
義彦君の想いと志を継いで頑張って下さい。
懸命に努力し、働いてきたと思うので
心から義彦君の霊が安らかに休まれるよう御祈り申し上げます。

平成十五年九月十四日　夜

大島先生を偲んで

理学療法学科長　伊　橋　光　二

大島義彦先生は、平成９年４月、本学の前身である山形県立保健医療短期大学の発足と同時に教授として着任され、理学療法学科長に就任されました。平成12年４月の本学の開学から平成15年３月に退職されるまでの３年間と合わせて、計６年間にわたり理学療法学科長を務められました。一つの短大あるいは大学を立ち上げていく時期はたいへん苦労の多いものであり、大島先生は、まさに本学の礎を築く時期に心血を注がれたわけであります。私は、本学の開学時に赴任いたしましたので、３年間大島先生とともに職務に当たらせていただき、その熱意あふれる教育姿勢に触れさせていただきました。

大島先生の教育理念は「自ら学ぶこと」の一言につきると思います。担当科目のシラバス（授業要綱）の学生へのメッセージ欄には、必ず「自ら学ぶ姿勢を重視する。大学は学ぶことが許されている場であるが、学ばなければいけないわけではない。学びたくなくなったら、すぐ進路を変更すること。」と書かれておりました。昨今の、中学、高校時代の手取り足取りの教育に慣れた新入生などは驚かれたかもしれませんが、大島先生の長年にわたる様々な経験から発せられた貴重なメッセージだと思います。大島先生の薫陶を受けた学生諸君が、その自ら学ぶ能力を開花させ、医療の発展に寄与されることを心から願います。

昨秋、退職のお気持ちを固められ、今春からは新たな老人保健施設の長として、ご自分の思い通りの医療を展開するのだと計画を練っておられました。しかし、冬になって体調を崩され、私どももたいへん心配し、一日も早い快復を念じておりました。私が最後にお目にかかりましたのは、７月に所用があって施設長を務められておられる老人保健施設におじゃました時でした。電話を差し上げてから出かけましたが、私の車が駐車場に入ると、駐車場脇の畑の中から出てきて迎えていただきました。植物や農作業をこよなく愛した大島先生らしいお姿に、だいぶお元気になられたかと思いました。しかし我々の願いは叶わず、９月７日にご逝去の報に接することとなってしまいました。

我々教員と学生の目の奥には、在りし日の大島先生の姿が焼きついております。大島先生の思いを胸に、本学をさらに発展させて行きたいと思います。大島先生、ありがとうございました。合掌。

大島先生の思い出

理学療法学科４年　大　野　崇　志

私たち理学療法科４年生は下級生と比べ大島先生と一緒に過ごした時間が長く、その分講義や先生の研究室にて先生のユニークな、そして、スケールの大きな話を沢山聞くことが出来ました。中でも私は、そんな先生の話を聞くことが好きで、個人的にも先生の研究室を頻繁に訪れていました。そのため、私は先生と最も多くの時間を一緒に過ごした学生の一人だと思います。

先生と過ごした日々の中で最も印象に残っていることは、先生の紹介で大学２年の夏休みに一人でバングラデシュに行ってきたことです。私は発展途上国における国際協力に漠然と興味を持っており、先生が長年バングラデシュにおいて医療技術協力をなさっていることを一年生の時から知っていました。そこで、先生にアポイントメントを取っていただき約２週間バングラデシュに滞在することができました。滞在期間中、多くのことを見て、聞いて、体験し、その全てが新鮮でした。

このバングラデシュでの経験は、私の大学生活における最大の財産だと思います。この経験により、漠然と抱いていた国際協力に関する興味・関心はより強くなり、私の進路選択において大きな影響を及ぼすことになると思うからです。すなわち、私も理学療法士として何らかの形で途上国での国際協力に携わっていきたいという考えを持つようになり

ました。

２年前、大島先生が私に、バングラデシュに行くチャンスをくださったことで、私は理学療法士として国際協力に携わりたいという目標を持つことが出来ました。この目標を掲げこれからも努力していくことは、きっと大島先生も喜んでくださることと思います。

義彦さんを偲ぶ

ステビアの詩

長野県下伊那郡豊岡村河野中学
同年生　久保田　倭　子

過ぎし日
仙台でお会いしました
あなたの手で静かに眠りに就きました私の瘤
そこは　迷い　不安　虞れ、痛み、苦しみ
全てを連れて　安住の園でした
あなたの自信　力　優しさの源を探したい
（ステビア　僕が育てているんだ）
（甘いお茶にします　砂糖の何倍も甘いそうです）
（利用の仕方研究頼みます　これからはゆっくり時間を
　かけて色々やりたい　僕の内にあるアイデアで
　一緒に何かが出来たらいい）
（六十越したから　自己主張して生きたいです）

メール交換メンバーが揃いました
感性も豊かな知識も届きました　ファイルコピーの
裏技極意はどうしたのかしら　三ヶ月　束の間でした
お便りが途絶えました

病気療養中……
……突然のお便りでした　三月十二日
そこまで迫っている　残された時間は僅か
どう使うか考えている
信じたくありませんでした
それは　あなた自身が一番重かったこと
手術　それに続く闘いの時間

四月十九日　山形
あなたをお訪ねしました
手術は成功だった　煙草を手にするあなたは

元気を装っていました　饒舌でした
達観し完成の城(しろ)はあなたの誇りでした
そこには凝縮された美学がありました
あなたの力が克つと信じて　戻りました
思い出と　安らぎと　納得の時間
成功を語る場所を共有したいと考えました

六月二十二日
あなたと扶美さん
正治　常雄　博敏　義人　充代　韶子　ヨネ子　倭子
さくらんぼ　食事会　蔵王　山の寺
故郷　中学生　物語り　あなたの城　知識実績誇り
あなたは息遣いをじっと伝えていました
まだまだすることがいっぱいと語りながら
何が残せるかを模索していました
医学書の編纂　そう　フルーツトマトの話もありました
限りがありません　時間はどうか
（だいじょうぶなんでしょ）
（医者年齢は正確なんだ）
祈りました　神が存在する事を祈りました
二〇〇三年九月七日午後五時三十分
永遠の旅立ちの刻
あなたは友達との長いブランクをそのままに逝きました
光でした　煌めいて宇宙に往ってしまいました
もっと語って欲しかった　これから語るといっていた
約束を反故にして　逝ってしまいました
一点のくもりも無い
僕の医学　研究実績育成　医学施設　地域介護
スポーツ医学　遺しました
もう声を聴くこと　問いかけ全て叶いません

残念なのは　無念なのは　あなた自身
どうかゆっくりお休みください
扶美さんが　子供さんたちが
あなたの遺志を受け継いで
あなたの愛を繋いでいきます
悠愛会はとこしえ
忙しすぎた兄さん　節子さんが語ります
時は流れます　何が遺せるのか

遺せないで逝くのが凡
あなたはたくさん遺しました
ゆっくり　のんびり　おやすみ下さい

そして
三日
ステビアの白い小さな花が咲きました

二〇〇三年九月十四日　倭子

義彦さんを偲ぶ

ステビアの詩Ⅱ

今戻りました
義彦さんを偲ぶ会の余韻の中にいます
存在の確かな事　愛の深さ
沢山の方達を幸せにしています

新幹線の中では山形に行けば
再義彦さんに会えると考えていました
やはり認めなければなりませんでした
どんなに語っても語りきれない人だったと強く感じます
都落ちと思う新潟を去るのを拒んだり
スキーのリフト乗車の裏技を考えたり
談話を好み　愛唱歌を歌い
手術の医術を教える姿勢
忙しい時間の見事なコントロールで園芸も楽しみ
闘病の床にあっても気配りをし
普通の人の何倍も生きたと納得する
みんなみんな義彦さんでした

素晴らしいご家族
暖かくて心ある人々
義彦さんの深い愛が繋いでいます

頬を真っ赤にして　髪が後ろで少し跳ねていました
走って行きます　ハト小屋で何かがあった様子
義彦さんの思い出の中には　ハトの映像が重なります

発想が豊かでした　視点がユニークでした
洞察は外さずドキッとさせられました

一番給料がいい職業は何か
河野村では診療所の先生だ
よし医者になろう
そこで医者になってしまう
そして医学に留まらず
人としての全てに精通してしまう
合理性　機知に溢れる指南
思いやりから生まれる深い愛

私の背中もすっかり元気です
迷ったままではいけない　トライして
失敗したらやり直せばいい
ずっと悩みっぱなしに終止符をくれました
書きます　約束しました
あの頃描いた夢や思いを書き連ねていきます
義彦さんには読んでいただけなくなりましたが
何をすべきか　何をしたいか　決まりました
書きます　まずは
義彦さんに宛てた手紙を書いています

有難うございました

今年も
ステビアの白い小さな花が咲いています

二〇〇五年九月十八日山形から戻って　倭子

父・大島義彦と私

長男　大　島　裕　紀

私の父・大島義彦が亡くなって３年になるが、自分と父との関係について未だに自分なりの“整理”が十分にはついていない。自分の人生にとって父はあまりにも巨大な存在であり、あらためて正面から整理し直そう、“総括”しようとすることは自分にとってもかなりの心理的な苦痛と労力を伴うことでもあった。このため、自分の人生にとってもこの“総括”が必要・重要と思いながらもこの苦痛・労力の伴う仕事から背を向けかけていた

面もあった。以下はあくまで現在の自分の立場における暫定的な“整理”に基づき、父と私との関係を思い起こしてみるとともに、大島義彦の家庭での一面・家族からみた一面を記してみたいと思う。

大島義彦はその人生のなかで様々な分野で多くの仕事をしてきた。あまりにも広い分野で多くの仕事をしてきたため、その仕事の全貌を知ること自体が難しいほどである。大島義彦を知っている人ならおわかりの通り、大島義彦は整形外科の医師であり、大学教授であり、教育者であり、経営者・企画立案者であり、NGO活動家であり、社会運動家（革命家？？）であり、思想家・哲学者であり、第２種兼業農家（？？）であった。また理知的で議論好きな信州人であり、周囲に迎合せず体制に染まろうとしない反骨の人であり、弱者の立場を忘れないリベラルな人であり、一方で理想だけを追うのではなく現実を直視して物事を判断しようとする現実主義者でもあり、自分から進んで動いて物事を解決しようとする行動の人であり、明るくユーモアにあふれ包容力のある人格者であり、家庭菜園・日曜大工・料理や囲碁・将棋など多くの趣味をもった趣味人であり、スキーや野球などを愛したスポーツマンであった。私にとっては尊敬すべき偉大な人物であり、人生観・世界観・価値観などの師匠であり、そしてそれよりも何よりも、以上のような偉大な人間が私の父であるという事実からある意味で必然的に生じうることだが、私の人生において極めて大きなプレッシャーを与え続ける存在であった。今でもそのような存在であり、おそらくは今後も私が死ぬまでそのような存在であり続けるのであろう。ある意味で私のこれまでの人生はファーザーコンプレックスとの戦いでもあった。

根本的に私は父親とは長所・短所が正反対であり、父が何事もてきぱきと要領よく仕事をこなすのに対して、私は要領が悪くて、てきぱきとした行動が苦手であった。父が社交的・積極的なのに対して私は内向的・引っ込み思案。父はスポーツ好きだが私は運動音痴。私は小さい頃から立派な父の背中を見て育ち、父を慕い尊敬し、父のようになりたいと思いながら、しかし全く父のようには行動できなかった。特に小学校低学年の頃などは時間内に図画工作や読書感想文などの課題が終わらずに居残りをさせられたりし、体育では常にビリから１・２番であった。いわゆるいじめられっ子でもあった。自分ではそれなりに努力しているつもりであり、また少しずつ短所をあらためていったつもりではあったのだが、とても父のようにはなれそうもなかった。父が周囲の人から尊敬されているのを見たり、また周囲の人から“お父さんのように立派なひとになるんだよ”といわれたりした時など、私は非常なプレッシャーを感じていたものであった。

そんな私に対しては、おそらくは父も歯がゆい思いをもっていたのではないかと思われる。父に対して私が持つコンプレックスの大きさを、父自身がどの程度認識していたかは不明だが…。父の教育方針は、一言でいえば「自分で物事を考えさせる」ようにし、「自分で物事を考え、判断し、行動し、問題を解決できる」人間を育てる、ということであったように思える。私が何か失敗や問題を起こしたとき、学校の成績が悪かった時など、父が私を叱る際には頭ごなしに叱ることは少なく、時には叱ることもあったが、必ず「何が悪かったのか、どこが悪かったのか」とたずね、自分で分析をさせて自分で反省させるようにしむけていた。従って基本的には、世間的にみれば私の父親は比較的“やさしい”父親だったと思われるのだが、時としてこの“自分で考えさせる”ことが私の心理的プレッ

シャーを増大させることもあった。

また父はしばしば人としての生き方や世の中の動きについて、私たち子供たちにいろいろ語ってきかせたりしたものであった。直接的にベトナム戦争や反戦・平和といった問題について自分の考えを話すこともあった。ただし父が昔学生運動時代に行なっていたことの詳細については、生前には全く聞いたことがなかった。父の葬儀の際の弔辞で私が最も興味深く感じたのが、木村先生による学生運動時代の話であった。また父がよく話したこととして、父は大学時代には奨学金とアルバイトだけで生計をたて、逆に貧しい実家に仕送りさえしていたこと、“最近の学生はなってない”といったことがあった。いろいろ“良くない”人物や生き方・態度をあげて、最後に「おまえはそういうふうにはなるなよ」といわれることも時々あった。多くの場合私はこの父の話を平然とした表情で、または笑顔で聞いていたが、内心はこの時が最も心理的プレッシャーを感じる瞬間であった。

小さい頃・子供の頃の、父と遊んでもらった楽しい記憶ももちろんたくさんあるし、楽しい思い出の方がはるかに多い。医師として多忙であったはずであるが、父は私たち子供や家族との時間を大切にし“家族サービス”に努めていた。夏休みに佐渡や東京・北海道などに家族旅行で連れて行ってもらった楽しい思い出。冬の朝早くから家族みなで車に乗り込み、スキーに行った思い出。この時には決まって父の好きなトランペットの曲のテープを聴きながらのドライブであり、家族はみな今でもこの曲を聴くとスキーを思い出す。自宅の庭で、新潟でも山形でも、家庭菜園造りや日曜大工を手伝ったり、家族みんなで庭にコンクリート性の池を造ったりした思い出。どんな場面においても、父はその都度アイデアや博識や行動力を発揮してすばらしいものを作ったり、私たち家族を楽しませたりしていた。私はそんな父をみて、その都度ますます父を尊敬すると同時に、一面でますますプレッシャーを感じてもいたのであった。ただし今にして思えば、このように家族との時間を大切にしたり、趣味に力をいれたりすることは、父にとっても仕事をこなしていく上での張り合いにもなったのであろう。単に気分転換というだけではなく、人生の上で仕事などとバランスをとるためには必要不可欠な時間でもあったのかもしれない。

父がその趣味として最も力をいれていたのが家庭菜園造りであった。しかし思春期になってからは一種の反発などもあり、私はこうした家庭菜園をあまり手伝わなくなった。山形に越してきてからは菜園の規模が拡大し、ビニールハウス菜園を造るなど、ほとんど“第２種兼業農家”化していったが、年を経るに従って私はほとんど手伝わなくなってしまった。今にして思えばもっと父の手伝いをすればよかったと思っている。

私が父や母と同じ医師を志したのにはいろいろ理由はあったが、父と同じ方向性の医師を目指したいと思ったことは全くなかった。ところが学力がおぼつかなかった。高校はなんとか進学校とされる高校に入ったものの、不勉強というか、やはり今にして思えば要領の悪さのため浪人生活を送ることとなった。２浪しても国公立の医学部には合格できず、３浪目で当初はブルジョアの大学と考えてきらっていた私立の医大も受験し、埼玉医科大学に入学することとなった。念のために述べておくが、私立医大をきらっていた理由は、偏差値うんぬんを問題にしたのではなく、高額の学費がかかるシステムと切り離すことのできない私立医科大学の存在そのものをきらっていたのである。現在は自分の母校である埼玉医科大学に誇りをもっている。臨床医学・医療のレベルについては、外病院での研修

の経験などからいっても、他の大学や医療機関に引けをとらず、むしろ科によっては凌駕すると思っている。私立医科大学のかかえる学費の問題すなわち入学し在籍することの可否に学力以外の経済的な問題が関与してしまう問題は依然として解決し得ない問題ではあるが、学費の多寡が大きいものの、格差社会化した日本においては国立大学でもあるていど同じ問題は存在する。要するに情けないのは、当初はきらっていた私立医科大学に、自分が３浪してせっぱつまると何の原則もなく手のひらを返すがごとくに受験し、合格すると親のすねをかじりまくって入学して平然としている私自身である。私立医大やそこに学び働く人々は決して卑下されるべきものではないのであり、卑下さるべきはこのような支離滅裂な行動をとっている私自身である。父は大学時代を自分の力でのりきったのに対して、なんという情けなさか……。

父が末期ガンであることが判明したとの知らせを聞いたのは、バイト先だった群馬県太田市の総合太田病院（その前には一時期、２年間ほど勤務していた）のそばのレストランで食事をしている際に、弟からの携帯への電話によってであった。それまでは私は医師になってからはあえて山形に戻るのを避けていた。父の存在が無いところで、父と比較されることなく、自分の力を伸ばしたかったし、また正直にいえば、父のいる病院で研修をする自信がなかった。少なくとも一人前の医師としての力をつけるまでは山形に帰りたくはなかったし、自分のペースで力をつけ業績をあげたいと考えていた。もっと正直に言えば実家に帰ることは想定しておらず、想定せずに人生計画を立てていた面があった。しかしこの弟からの電話以降、そのような“勝手な”行動は許されないこととなった。実家では悠愛会として３か所目となる介護老人保健施設、クリニック、及び特別養護老人ホームの「あこがれ」がまさに翌年の４月から開業予定となっていたし、また巨大化した悠愛会の組織にも多くの解決を要する問題がみられるようになっていた。「あこがれ」は父が健在であることを前提に建てられたものであり、また組織の問題の解決にも父の力が引き続き必要な状態であった。ところが父のガンのため父の力が得られないこととなってしまった。東北・山形での医師不足の深刻化もあり、新たな施設の医師の確保も困難な状態であった。それまで“山形へ帰れ”などとは一度も言わなかった父から「１年だけでもいいからこっち（山形）に戻らないか」と言われた。このため、まだまだ研修・研鑽が必要な未熟な状態ながら、週１回水曜・木曜は埼玉へ戻る約束で、2003年４月より山形に戻ることとなった。以後父が亡くなるまで、そして結局現在に至るまで山形で主に老健施設での仕事にたずさわることとなった。

末期ガン患者としての父は、全く末期ガン患者らしくない患者であった。私も現在までに多くのガン患者や末期状態の患者を診てきたが、そのような患者の類型には、まるであてはまらない患者であった。多くの進行ガンの患者では、嘆き悲しみふさぎ込む人もいれば、逆に気丈なまでに自分の病気・残りの人生と向き合おうとしてがんばって生きようとする人、周囲から見ると一種の悲壮感が感じられることもある。また時には一見達観したように落ち着いてみえる人、あるいはこれらの混在した人などがみられることが多い。しかし父の場合は上行結腸癌・多発性肝転移・癌性腹膜炎という現実を驚くほど冷静に受け止め、少なくとも周囲からみた範囲では冷静に、人生の残り時間とやるべき仕事を計算

し、かといって気負った様子は全く見せず、自然ないつもの父のまま行動していた。さすがに抗癌剤治療のあとの数日は嘔気や倦怠感で寝込んでいたが、それがおさまるといつものようにあちこち仕事や趣味に飛び回っていた。仕事の合間に古くからの友人と再会したり、そうかと思うと「これを使ってみないと死にきれない」などとおどけて言って、発売されたばかりの家庭用ハイビジョンビデオカメラを購入してあちこち撮影してまわったりしてもいた。幸いにして初期の抗癌剤治療で病巣の縮小傾向がみられたため、当初は無理と考えられていた原発巣切除の手術を行うことができた。手術後に病院から勝手に外出してしまうなど、医者から見た患者としては、父は明らかに“わがままな”患者であった。ご迷惑をおかけした主治医の瀬尾先生や済生病院外科の先生・看護スタッフの方々には深く感謝している。手術の結果、当初の予想された余命よりは長く生きることができたが、結局９月に永眠することとなった。父の希望と母の献身的な治療・看護などによって、父は最期の日々を極力自宅ですごすことができた。

父の癌が判明してから亡くなるまでの間に、父から私に「これは遺言として言っておくが」として話してくれたことがいくつかあった。「おまえはこの時代にあってユニークな人間であり、そのこと自体、貴重なことであり誇ってよいことだ」「お父さんもお母さんも、狭い分野であっても、ある時期には世界をリードする仕事をしていた。おまえも一生のどの時期でも、狭い分野でもどんな分野でもよいから、生きているうちに何か一つ世界をリードする仕事をしてみろ」といったことを話してくれていた。前者の話は私に自信をもたせてくれるものであり、後者の話は最後に私に与えてくれたプレッシャーであった。父の“遺言”に答えられるかどうかはわからないが、この“遺言”の与えてくれるプレッシャーはいつまでも忘れずに生きていきたいと思っている。

最後に大島義彦の長男として、これまで父をささえて頂いた父の友人・同僚その他全ての方々に対して、感謝を申し上げさせて頂きたい。ありがとうございました。